せいかつのがら

東海・北陸ブロック 障害者芸術文化活動広域 支援センター

報告書　厚生労働省「平成29年度障害者芸術文化活動普及支援事業」

ごあいさつ

社会福祉法人みんなでいきるでは、平成28年度に厚生労働省『障害者の芸術活動支援モデル事業』の採択を受け、障害のある方の創作活動を支援する相談窓口、新潟県アール・ブリュット・サポート・センターNASCを設置しました。

NASCでは大きく、『相談支援』『人材育成』『ネットワークづくり』『発信』の4つの機能を主軸に展示会の開催やアーティストの発掘、研修会等を実施してきました。

今年度においては、1年間モデル事業で培ってきたノウハウを広域的に伝播していくために、同じく厚生労働省『障害者芸術文化活動普及支援事業』の採択を受け、東海･北陸ブロック障害者芸術文化活動広域支援センターを設置し、8県を対象に支援を行いました。

そのような状況も踏まえ、各地で間違いなく障害のある方の創作活動を支援する機運が高まっていることを実感しています。

このことは、2020年に東京オリンピック･パラリンピックが開催されるといった施策的な後押しがあるだけでなく、福祉の現場サイドにおいて障害のある方の創作活動を推進する意義や楽しさが分かってきた表れなのではと考えています。

彼らがもつクリエイティブな世界観に、我々がもっと近づくことができるのであれば、一層社会は厚みを増し成熟した姿になるのではないでしょうか。

社会福祉法人みんなでいきる
理事長　大島 誠
平成30年3月

神戸連続児童殺傷事件が起こった1997年。私は犯人と同じ中学3年生でした。

毎日のように、テレビで映し出される光景を見て、今後日本はどうなっていくんだろうと暗い気持ちが日に日に積もっていく中で、図書館でふと目に留まった本が糸賀一雄先生が著された『福祉の思想』。

読解力もなく、文学少年でもなかった私にとってほとんど書かれていたことは理解できませんでした。ただ、冒頭で障害のある方の創作活動や、なかなか解説がないと分かりにくい狂言の世界を純粋に楽しむ力があるというエピソードが書かれていて、朧気ながらに『人と関わる』ことで、世の中なんとかなるんじゃないかと救われた気がしました。

そして、今、こうして障害のある方の創作活動に携わっていることに不思議な感覚を覚えてます。

実際に、創作活動を通じてアーティストやその周りの方々と『関わる』ことで益々この仕事にワクワク感と魅力を感じています。

悲しく切ないことが続いても、ふとした瞬間に楽しく幸せなことが起こるかもしれない。

素敵な出会いがあれば、ちょっとしたきっかけで別れたりもする。
儚いようで、強く確実にそこにあるもの。
これから出会うであろうそうした『関り』を一つひとつ大事にしていきたいと思います。

東海･北陸ブロック障害者芸術文化活動広域支援センター
新潟県アール・ブリュット・サポート・センター NASC
センター長　坂野 健一郎

せいかつのがら

東海・北陸ブロック 障害者芸術文化活動広域支援センター 報告書

6 東海・北陸ブロック 障害者芸術文化活動 広域支援センターの取り組み

8 ささえる 相談支援

10 そだてる 人材育成

14 であう 調査・発掘

18 ひろめる 企画展

26 ひろめる 公開オーディション

28 いっしょにつくる 協働事業

36 そのあと インタビュー

55 巻末資料【成果物・情報発信】

56 成果と課題

そばにいる人だから感じられること

障害のある方からふいに手紙を渡されたり、記念日に似顔絵を描いてもらったり、福祉施設の職員さんの間ではたまにそんなことがあるそうです。私たちにとっては何の変哲の無い絵でも、もらった職員さんにとっては、美術館で飾られている絵よりも大切なものだったりするそうです。私の良いとみんなの良いは異なります。
（その魅力は共有できるでしょうか？）

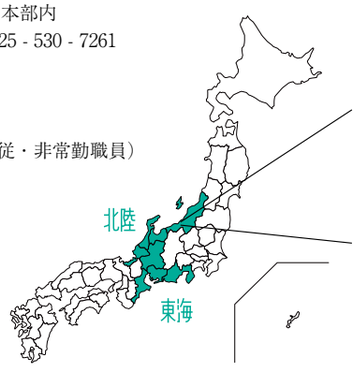
まだ名前のついていないものごと

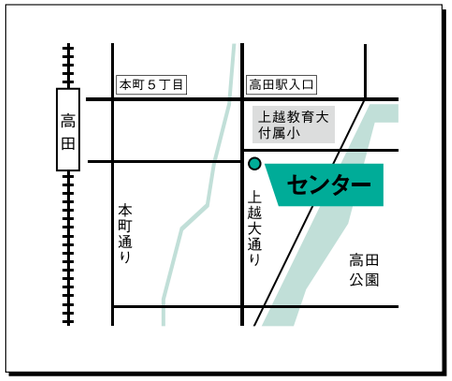
家の中で大きな声を出されると迷惑でしかありませんが、大声選手権という名前のステージがあれば輝けるかもしれません。どんなものごとも、どのように紹介されるのかによって見え方は変わってきます。様々な形のステージがあれば、より多様な人たちが自信を持って舞台に上がることができるかもしれません。
（どんな名前をつけたら良いのだろう？）

東海・北陸ブロック障害者芸術文化活動広域支援センター

社会福祉法人みんなでいきるでは、平成28年度に厚生労働省『障害者の芸術活動支援モデル事業』の採択を受け、その1年間で培ったノウハウを広域に伝播していくために、平成29年度より東海・北陸ブロック障害者芸術文化活動広域支援センターを設置し、8県を対象に支援を行いました。

【上越本部】
〒943 - 0834
新潟県上越市西城町 2 - 10 - 25 大島ビル 307 号室
社会福祉法人みんなでいきる法人本部内
TEL：025 - 530 - 7264 / FAX：025 - 530 - 7261
【人員体制】
センター長　1名（専従）
事務局員　1名（専従）
アート・ディレクター　1名（専従・非常勤職員）
経理担当者 1名（兼務）





3 調査発掘

情報提供に基づき東海・北陸ブロック内のアーティストの発掘を行いました。

4 展示会の開催

東海・北陸ブロック内における作品を展示しました。

◎アール・ブリュット展in上越３
―生活の柄―（平成 29 年 11 月 18 日～ 23 日）
◎アール・ブリュット@高岡
―らしくとままでー（平成 30 年 1 月 24 日～ 28 日）

5 公開オーディションの開催

障害のある方の創作活動を広めるために美術分野だけでなく、舞台芸術を広めるために公開オーディションを開催しました。

◎パフォーマー公開オーディション　あしたの星☆
―障がいのある方もない方も新たなステージへ―
（平成 29 年 12 月 23 日（土））

6 情報発信

◎ＨＰの開設・更新
◎Ｆａｃｅｂｏｏｋページでの情報発信

1 相談支援の実施

相談の窓口を常設し、東海・北陸ブロック内における障害のある方の創作活動に係る相談に対応しました。今年度の相談の特徴として、新潟県外の関係機関からの障害者芸術文化活動普及支援事業の内容照会、展示会などを一緒に開催できないかといった協働事業の打診が増えたことが挙げられます。

2 人材育成・研修事業

福祉施設関係者、教育機関、美術関係者向けに障害者芸術文化活動に関する研修、ワークショップなどを開催し、障害者芸術文化に関わる人材を養成しました。

◎アート・ディレクター養成研修会
　日時：平成２９年１０月１２日（木）～１３日（金）
　内容：アートマネジメント・ワークショップ
◎権利保護
　障害のある方の創作活動に係る事例検討会
　日時：平成３０年２月１５日（水）
　内容：概論・権利擁護に係る事例検討会

ささえる 相談支援

東海・北陸ブロック内における障害のある方やその家族、行政機関や福祉事業所などからの相談に対応しました。相談内容は平成28年度と比較し、協働での事業の実施および関係機関からの障害者芸術文化活動普及支援事業の内容についての照会が増えました。

相談延べ件数

173件

美術147件・舞台芸術26件
（平成30年3月末日現在）

ブロック巡回訪問の実績 ※新潟県を除く

東海・ブロック内における支援センターが開催する協力委員会への出席及び未実施県への行政機関・関係団体への事業の周知を行いました。

県名	愛知県	静岡県	三重県	岐阜県	富山県	石川県	福井県
日時	7月25日 10月10日 2月26日	8月23日 3月17日	8月30日	7月26日 12月24日 3月18日	7月18日 10月3日 1月27日 3月24日	7月19日	8月29日 11月27日

連絡会議の開催

東海・北陸ブロック内における支援センターおよび未実施県の情報交換の場として連絡会議を開催しました。

第１回	第２回
日時　平成30年1月23日(火)13:30～16:30 場所　カネジュービル(愛知県) 内容　事例報告：愛知県における県域支援センターの取り組みついて 参加者数　８名	日時　平成30年3月27日(火) 場所　カネジュービル(愛知県) 内容　講義：障害のある方の創作活動に係る権利の基本的理解 参加者数　６名

無料法律相談

障害のある方の創作活動に係る権利保護のための無料法律相談を実施しました。
弁護士：みたけ法律事務所　見竹 泰人 氏

実施日	10月4日	11月1日	12月6日	1月10日	2月7日	3月7日
相談件数	0件	0件	1件	1件	2件	1件

相談事例

窓口を設置して２年目となり、今年度は障がいのある方やその家族、福祉事業所の他に、行政関係から作品調査や展示会開催などの相談も寄せられるようになりました。東海・北陸ブロックを支援する立場になったことで、新潟県以外の地域からも相談を受ける機会が多くなりました。

アール・ブリュットの展示会に出品したい！ 絵を見てほしい！

相談者

アーティスト（知的障害者）

相談内容

統合失調症の四十代女性です。アール・ブリュットの展示会に出展できたらと思い連絡した。習った事はないが、絵を描く事が好きで毎日描いる。主にペン画。ずっと、一人で絵を描き続けているので、絵を見てもらえたらうれしい。※メールでの相談

対応

添付されていた作品を確認したことを伝える。上越展の出展作家はすでに決定しており、その後しばらく展示会を開催する予定がないため、当法人以外で、新潟県内の障害とアートに関わる団体の活動を紹介。新潟市の『アートキャンプ新潟』では、創作をすることと共に作品を見てもらう機会として、定期的に「創作の場」を開催。ここに作品を持参してみてはどうか？と提案。また、『k-box』という団体でもステージ発表の機会とともに、アート活動も行っていることを伝える。

展示する場所を確保してもらいたい！

相談者

アーティスト(精神障害者)

相談内容

ブロックセンターでは年に何回か展示会を開催しているが、いつも自分の作品が選ばれない。あえて、展示する作品リストから外しているのではないか。作品に込める思いは、誰にも負けていないつもりである。誰かに見てほしい、誰かに評価してもらいたい、この思いに応えてもらいたい。

対応

展示会毎に展示する作品が変わることと、今回は相談者の作品は展示会の作品のコンセプトとあわないものであったため展示しなかった旨を伝え了承される。この相談をきっかけに主催者側が作品をセレクトする展示会だけでなく、作者の思いや伝えたいことを反映できるもちよりの展示会場の必要性に気づいた。11月に開催したアール・ブリュット展in上越3ではもちより展示会の場を企画し、相談者もお気に入りの作品を展示していた。

今後について

大きな展示会だけでなく、身近に作品を展示できる場が必要だと感じた。次年度は、作品を展示するだけでなく、同じ空間に誰もが自由に創作活動を行える創作の場を試行的に実施していきたい。

アート・ディレクター養成研修会

取組のねらい

福祉と美術、それぞれの分野の専門家は存在する一方で、どちらの分野も横断する専門的な知識を持った人材が少ない現状がある。県内では多くの創作活動や展示会は福祉施設職員や家族など周りの人によって行われている。なにを魅力とみなし、どのように伝える形にしていくのか、周りの人は様々な判断を問われている。県域で総合的に障害者の文化芸術活動を広めていくために、作品の捉え方や魅力の伝え方、企画展開催のノウハウ、作品使用の許諾事務などを学べる研修会を実施した。

第1回

日　時：平成29年10月12日（木）・13日（金）
場　所：新潟県新潟市：CAFE IBIS
参加者：15名
講　師：深澤孝史氏（アーティスト）

トーク
アート・ディレクションとは？
深澤さんのこれまでの取り組みから
ワークショップ
他人の大事にしているものを勝手に大事にする方法

〝これは作品と言って良いのか？〟〝発表は当事者にとってはどんな機会なのか？〟など参加者からの障害とアートにまつわる疑問や考えについて、参加者同士が意見を出し合い自分たちの言葉で障害とアートについての考えを深める時間となりました。深澤さんからは、自分たちの為だけではなく、外に見せる必要性を作っていくことが大変、大切な作業であり、その際に見せる人、見せたい人を複数想定しながら企画をしていくと良いのでは、とのアドバイスがありました。

ワークショップ1
展示会企画のためのチェックシートづくり

「展示会をする際に、最初に問うことは？」という問いから、参加者と一緒に展示会を企画する際に使用できるチャート式のチェックシートを作成しました。目的→誰のために→何を見せたい→展示の位置づけと、流れを整理することができました。また、チャートは進むだけではなく、時にはじめに戻って考えてみたりと、行き来しながら企画を練っていくことが大切だという学びがありました。

第2回

日　時：平成30年3月6日（火）・7日（水）
場　所：新潟県新潟市：杜のテラスSAKURA
参加者：8名
講　師：鈴木一郎太氏（株式会社大と小とレフ取締役）

ワークショップ2
模擬展示会づくり

研修会場の中にあるものの中から、自分が気になるものを見つけて、その魅力を紹介する方法を考えるというワーク。いわゆる作品でないものから魅力を見つけること。またその魅力を100円ショップにあるものを使って伝える手段を考えました。頭と手を交互につかう実践的な時間となりました。

障害のある方の創作活動に係る権利保護の取り組み

障害のある方の創作活動に係る権利の基本的な内容について、講師である見竹弁護士より説明を受けた後に、実際に福祉施設の現場で抱えている事例の解決方法を検討しました。

作品のグッズ化などの2次利用、展示会への出展や作品の寄贈を受ける際の留意点など、活発な意見交換が行われました。話を聞いて終わりにするのではなく、現場で日々対応している事例を一つひとつ積み上げていくことの重要性が分かった1日でした。

弁護士 見竹泰人氏

障害のある方の創作活動に係る事例検討会

概要
【日時】平成 30 年 2 月 15 日（木）13:30 ～ 16:30
【場所】新潟県新潟市：新潟ユニゾンプラザ研修室
【参加者】15 名
【内容】ミニ講座
『障害のある方の創作活動に係る権利の基本的理解』
【講師】見竹泰人氏（弁護士：みたけ法律事務所）
【事例検討】参加者が持ち寄った 10 事例を検討
アドバイザー：見竹泰人氏（弁護士：みたけ法律事務所）

検討した事例（一部）

Q1　利用者が描いた絵を商品化したい。商品化したいのだが、本人は有名なキャラクターを真似て絵を描いたと言っている。個人的に似ていないと思うのだが著作権侵害にあたるのか？また、どのくらい似ていると侵害になるのか？

A1　どのくらい似ているという判断ではなく、本人がキャラクターを真似て書いたと言った時点で著作権の侵害に当たる。

Q2　利用者が描いた絵に、職員が色塗りをした場合の著作権はどちらに発生するのか？

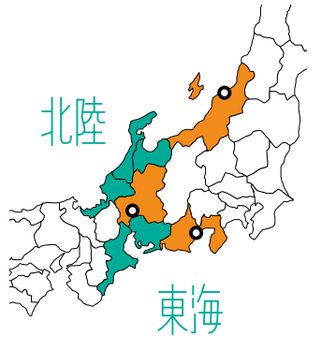
A2　単純な色塗りであれば、そもそも著作権は発生しない。その方にしかできない独創的な色塗りであれば著作権が発生する場合もある。

Q3　絵画をデザインとして利用する際に、大きさや色が変わってしまう可能性がある。その場合の事前の対処方法を教えてほしい。

A3　2次利用にあたって個々のケースごとに使用する作品、使用目的、変更点、イメージ図などできうる使用用途を具体的に示し、作品の使用について許諾をとることが重要である。

Q4　展示会の主催者として作品を作ってくれたら展示すると利用者家族と口約束をした。利用者はそのことを聞いてペットボトルを材料に作品の制作を行ったが、実際当日の展示会では作品を展示してもらえなかった。責任は問われるのか。

A4　著作権とは別の範疇ではあるが、もちろん責任には問われる。ただしこのケースでは材料からして訴訟にまで発展する可能性は低い。それ以上に今回の事例を教訓に、今後このような対応をして信頼関係が崩れることがないよう留意してもらいたい。



県域センター設置に向けての実地研修

1 取組のねらい

平成30年度に障害者芸術文化活動普及支援事業に取り組む見込みのある自治体を対象に実地研修を行いました。支援センターは開設することが目的ではなく、開設後にしっかりと実務を通じて役割を果たすことが重要です。ブロックセンターが実際に取り組んできた、相談支援や研修会、戸惑ったことや失敗事例などを伝達し情報交換を行いました。

2 実施内容

2日間に亘り、実務を伝える時間を設けました。障害者芸術文化活動普及支援事業の要である相談支援を中心に、協力委員会の機能や参加型展示会を開催する意義、創作活動にかかわる権利保護の研修会、平成29年度より実施した舞台芸術の取り組み状況などを事例に基づき説明しました。プログラム終了ごとに情報交換を行いセンターの取り組みを基に各県においてどのような運営ができるかを協議しました。センターからは特に相談の窓口が明確になることによって、個別的なものから団体間のものまで時には福祉の文脈を超えた、さまざまな相談が届いていることを伝達しました。受け止めた相談を一つひとつ丁寧に対応していくことで、障害のある方の創作活動がより広がっていくことを伝えました。

静岡会場
日時：平成30年2月20日（火）～21日（水） 場所：5風来館（ごふくかん）4階会議室 参加者数：7名
岐阜会場
日時：平成30年3月22日（木） 場所：ぎふ清流文化プラザ 参加者数：6名
新潟会場
日時：平成30年3月28日（水） 場所：東区プラザ 参加者数：2名

3 成果

支援センター開設前に実務を伝えることにより、実際の障害者芸術文化活動支援事業の内容や取り組む意義、事前に準備しておく事項を伝えられました。このことにより平成30年度の支援センター開設と実働が円滑になったと思います。センターとしても各県の事例を教えてもらったり学びの多い2日間でした。なにより各県の担当者と2日間しっかりと顔を合わせたことで、お互いコミュニケーションがとりやすくなったことも大きな成果でした。

協働でのセミナー事業

セミナーの企画依頼を受け協働でセミナーを開催しました。

セミナー&ワークショップ アール・ブリュットってなあに？

主催：新潟青陵大学・新潟青陵大学短期大学部
日時：平成29年7月12日（水）

新潟青陵大学・新潟青陵大学短期大学部では、新校舎竣工記念における地域貢献ウイークイベントにあわせて一般向けの公開講座を開催しました。センターとして、講座の企画・運営に携わらせてもらいました。夜間のセミナーにも関わらず近隣の方や、当事者家族、学生など多くの方からの参加をいただきました。

福祉とアートを考えるセミナー

主催：社会福祉法人みんなでいきる
日時：平成29年7月28日（金）

新潟県内の福祉事業所の職員を対象にセミナーを開催しました。障害のある方の創作活動を通じて現場や家族の間で起こった変化などを実際の事例に基づき学びました。和紙作家の方や福祉に興味がある一般の方の参加もあり様々な意見が交換されました。

福井県における障害者文化芸術活動推進のための研修会

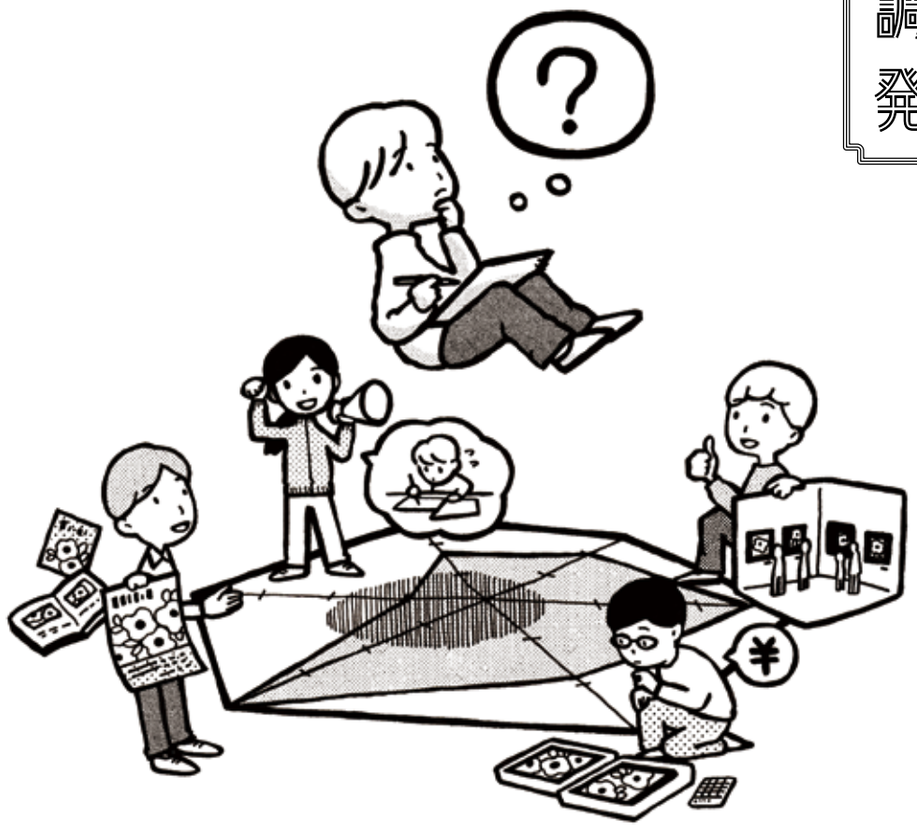
主催：NPO法人福井芸術・文化フォーラム
日時：平成29年11月27日（月）

障害のある方の文化芸術活動を推進していくために、国として取り組んでいる施策的な話を厚生労働省より報告いただき、その後センターから障害者芸術文化活動普及支援事業の実務について説明しました。後半は、会場が一体となり相談支援のあり方や人材育成、ネットワークづくりなど、今後福井県内でどのように障害のある方の文化芸術活動を進めていくか活発な情報交換が行われました。

アール・ブリュット@高岡におけるしんぽじうむ

主催：高岡市
日時：平成30年1月27日（土）

『アール・ブリュット@高岡chapter3～らしくとままで～』の開催に合わせシンポジウムを開催しました。センターとしては共催団体として、展示会におけるアーティストの紹介とシンポジウムの運営に協力しました。当日は近年まれにみる大雪でしたが、富山県だけでなく石川県・福井県からも参加者がおられ、非常に活発な意見交換が行われました。協力団体であるNPO法人障がい者アート支援工房ココペリの活動記録が上映されたり、滋賀県県民生活部文化振興課の木村さんによる糸賀一雄先生からつながる新生美術館の設立に向けた講演など盛りだくさんのイベントでした。



表現活動における環境の評価について

評価の方向性

ある絵に対して自分の為にコレクターが評価する基準と、商品利用の為にデザイナーが評価する基準が異なるように、誰が何のために行うかはその時々によって変わってきます。そこで本事業では作品ではなく、表現が生まれる環境に絞り評価のあり方を考えました。

目的と概要『誰が何のために行うか？』

入試のように評価の結果から優劣をつけるために使用するのではなく、活動を行う人たち自身が、自分たちの理想に対して現在の状況を確認できる、自己評価を行えると良いのではないかと考えました。そこで本事業では現場における自己評価ツールの作成を長期的目標とし、今年度は評価軸を考える基礎調査として、ブロック内で先進的に文化活動を行っている施設へ訪問を行いました。

訪問調査概要

福祉施設に3日間の滞在を行い、シャドウイングと職員への聞き取りを行いました。

シャドウイング：環境の中で起こった出来事を時系列に記述していく観察方法。

日　程：2017年9月6～9日

調査員：角地智史（東海・北陸ブロック障害者芸術文化活動広域支援センター）
大乗裕美子／伊藤愛（あいちアール・ブリュットネットワークセンター）

訪問調査先について

NPO法人クリエイティブサポートレッツ

2008年より重度の知的障害のある「久保田壮」という個人を全面的に肯定することを出発点にコンセプトを作り上げた公共文化施設「たけし文化センター」を展開。個人の「やりたいことをやりきる熱意」を、文化創造につながる最も重要な柱として捉える。これまでに利用者とスタッフの関係性を展示した「佐藤は見た！！！！！！」や、福祉施設を観光地と捉え、様々な人に滞在してもらう「タイムトラベル100時間ツアー」を行うなど、既存の福祉とアートの枠に収まらない取り組みを行っています。

訪問調査を通しての結果と考察

多様な表現が生まれる要因として、印象的であった日常の風景の様子と、職員への聞き取りから3つの項目に分けて紹介します。

シャドウイングを通して印象的だった風景 その1

1日目。施設の終業時間近くになって、柱に豪快にガムテープを巻きつけ始めたメンバーがいました。スタッフの方々は特にとめることなく淡々と掃除を行っていました。

2日目。ガムテープを巻きつけた彼は、ダンボールでロボットのようなものを作りました。そして前日に柱に巻きつけたガムテープを剥がしてロボットに貼り付けていきました。

3日目の彼はロボットに貼っていたテープを剥がし、今度は棒に巻きつけました。その上に黄色いテープも巻きつけて剣のようなものを作りました。銀色のテープはすっかり見えなくなりました。

シャドウウイングを通して印象的だった風景 その2

高橋舞さんは、施設にある物をガムテープで何重にも貼り込んでいく行為を行っています。木彫りの熊や、木材、剥製のキジまで様々なものを貼ってきました。それらの作品はこれまで公募展（ポコラート）に入選するなどの評価を受けています。そんな高橋さんの姿を真似て、メンバーの一人が高橋さんの作品にガムテープをさらに貼り始めました。きっちりと貼られていた作品の上に、まばらにテープが貼られていきます。高橋さんは少し離れたところにいましたが、特に気に留めない様子。職員は「貼りが甘いよ～」とコメント。しばらくしてメンバーは気が済んだのか高橋さんに作品を返しました。高橋さんは何を言う訳でもなくその上からテープをまた貼り始めました。

ヒアリングを通して

スタッフ夏目さんからの言葉

結論を出さなくてもいいところがあったらいいなという、まず話が最後まで聞いてくれる場所。レッツは私にとってのリアルに近いそんな場所でした。

「かたりのヴぁ」

参加者同士が〝対話〟する会。他人の考えにじっくり耳を傾ける。そこにいること（たとえ声を発しなくても）も含めての対話の場。月に一度開催され、施設職員やメンバー、一般の人も参加して一つのテーマについて話し合う。

施設長の久保田翠さんの言葉

この場所で大切にしていることは排除しないということです。そうするとスタッフも大切にしないといけなくなる。ルールを決めてしまうと守れない人が出てくるので、折り合いをつけていくということが大切。けれど人それぞれで折り合いをつけるとめちゃくちゃ混沌としてきます。

スタッフ水越さんからの言葉

ある時、久保田さんからとことん（一人のメンバーに）付き合っていいよと言われて、背中を押してもらえて、一人のメンバーのやりたいことにとことん付き合いました。

「おが台車」

とにかくたくさんの電化製品を持って散歩したいというメンバーおがちゃんの思いに向き合う中で、台車にものを積み上げて散歩する形に発展。いつしか「おが台車」と呼ばれる名物行事になった。スタッフも毎回どんな形に積みあがるのか楽しみだとのこと。

2つの風景からわかる環境の特徴

高橋さんがガムテープでものを覆ってしまう行為は、既存のものを壊しているとも、新しい立体を造っているとも言えます。また、壁面のいたるところに描かれた絵についても、壁が汚れたとも、作品が生まれたとも言えます。何かの行為の結果に対して、いかに判断をどう行うのかで、それが創られたとも壊されたとも言えるのかもしれません。レッツではその行為の結果に焦点を当てず、その人がやりたいことをやっていたのか?やりきれていたのか?という過程に焦点を当てていると感じました。結果を問わない姿勢がある創作の現場だからこそ、生み出される表現があると感じました。

スタッフ佐藤さんからの言葉

僕は僕自身も楽しくいたいなというのをいつも思っている。とはいえ、利用者さんはお金を払っているわけなので、僕や僕以外も楽しくいたいなという気持ちがある。もちろん障害特性は最低限の知識はある。一方で利用者さんに対して出会ってしまった友達だっていう感覚もあります。

ヒアリングを通して見えてきたこと

一つのルールを決めてスタッフの行動を促していくのではない施設長の姿勢と、スタッフひとりひとりが自分の興味や欲求と向き合いながら、メンバー、施設、社会との間で何ができるのかを探している姿勢があるからこそ、独特で力強い企画が行なわれていると感じました。

ショート訪問調査

社会福祉法人 ロングラン

日　程：2017年9月6～9日
調査員：角地智史（東海・北陸ブロック障害者芸術文化活動広域支援センター）
本間友一郎（アートキャンプ新潟）

新潟県内で事業所内にアトリエのある『ロングラン』へ訪問し、その創作環境について調査を行いました。利用者それぞれの障害特性に合わせた作業時間や席の工夫を行い、個々が集中して創作に向き合える環境づくりを心がけていることが分かりました。また、描いた絵を生かした商品販売や絵の貸し出しを通して、利用者の工賃につなげていこうとする姿勢がありました。

アール・ブリュット展 in 上越3
生活の柄

地域の人と文化をみつめる

上越の町を巡りながら作品鑑賞できるように、最大で4会場同時に作品展示をしました。作家の内訳は39名のうち県内作家が34名で、作品総数は約1,300点。会期中には、バリアフリー活弁士を招いての映画上映や作家自身が登場するライブペイント、全盲のシンガー・ソングライターのコンサートなど、障害のある人もない人も一緒に楽しめるイベントも開催し、福祉業界以外の集客を図りました。

家家、まちまち、見えないことがら
あたり前ですが、家にはたくさんのものがあります。
たまに、押入れの中からとり出して見てみると、
あの子からもらった、とか、苦労してつくった、とか
じんわりとその時の気持ちがよみがえってきます。
（捨てられないものの自慢話を聞きたい！）
あたり前ですが、町にもたくさんのものがあります。
昔からそこに住んでいる人と、その町を一緒に歩くと、
昔ここは川だった、とか、この親父に怒られた、とか
頼まなくても色々なことを話してくれます。
（瞽女をごぜと呼ぶことを知りました！）
高田という町にはたくさんの人がいて、
この町で、それぞれの暮らしをしています。
見たり、触れたりすることから
これ何？とついつい聞きたくなるような、
これねーとついつい話したくなるような、
そんな会にしたいと思っています。

（本展アートディレクター　角地智史）

展示会場：町家交流館高田小町

《全体趣旨》

今回で3回目となった新潟県上越市での展示会。過去2回は、日本を代表するアール・ブリュット作品を一堂に集めた展示会でした。新たな挑戦が求められる今回の展示会では、次の3つを企画のポイントに、地域の人と文化を巻き込む〝参加型展示会〟にチャレンジしました。

①展示作業や作品説明は、作家本人や家族・施設職員に参加してもらい一緒に展示会を作る
②地域で受け継がれる町家や盲目の女旅芸人「瞽女」の文化を取り入れた企画にする
③作品展示の他に、障害者も健常者も共に楽しめる関連イベントも実施する

展示会に向けたセミナー＆ワークショップの開催

「今回は、作家本人や家族・施設職員、障害者アートに興味のある方に、展示作業やキャプション作り、お客様への作品説明も体験してもらって、みんなで作り上げる展示会にしたいよね」……、そんなミーティングから〝参加型展示会〟の企画づくりは始まりました。まずは11月の展示会に向けて、セミナー1回とワークショップ5回を企画。7月のセミナーでは障害のある方の創作活動を支援する意義を伝え、その参加者の中で、展示会で作品を展示してみたい！という方から8月以降のワークショップに参加してもらいました。

概要
【日時】平成29年11月18日～23日
10：00～17：00
【会場】
・作品展示：町家交流館高田小町・旧今井染物屋
瞽女ミュージアム高田
・プレ展示：あすとぴあ高田
・映画上映：高田世界館
【主催】社会福祉法人みんなでいきる
【共催】上越市・上越市教育委員会
【後援】NPO法人くびき野サポートセンター
【助成】（公財）新潟県文化振興財団助成事業
県民たすけあい基金助成事業

アール・ブリュット作品展示

展示会場：町家交流館高田小町

それぞれの暮らしの中で行われている創作活動。なぜ作っているのかは作者によって様々ですが、多くの作者と出会う中で、全く別の場所で似たような気持ちを持って作っている人たちがいることを知りました。高田小町の会場では、一つの町家の中で、それぞれの作家の気持ちが少しずつ重なるように作品を並べました。

作家は、昨年までの事業で作品調査をした新潟県内の10名と、今年度広域支援センターとして調査を行った富山・石川・愛知県の4名、そして全国障害者芸術文化祭のサテライト展示として奈良より1名の作品を展示しました。

もちより作品展示

展示会場：旧今井染物屋

江戸時代末期に建てられた町家が会場。ここでは、21ページで紹介した参加型展示会のワークショップに参加したみなさんを中心に23名の作品を展示しました。150年の歴史を刻む町家と障害ある方の個性豊かな作品が想像以上にマッチして、来場からも非常に良い空間だったという声を多くいただきました。

見る／触れる作品展示

11月18・19日のみ

展示会場：瞽女ミュージアム高田

かつて上越の地で生活していた盲目の女旅芸人〝高田瞽女〟の文化を伝えるミュージアムを会場に、「大地の芸術祭」や「水と土の芸術祭」などで精力的に作品を発表している注目の現代美術家・関根哲男氏の作品を展示しました。見るだけでなく、実際に触りながら作品を鑑賞できる関根さんの作品。目の不自由な方にも作品を鑑賞していただける機会になりました。

瞽女ミュージアム高田

盲目の女旅芸人〝高田瞽女〟に関する資料や記録映像などを展示。建物は有形登録文化財に指定されている町家

一緒に展覧会をつくりませんか？ 参加型展覧会ワークショップ

ワークショップでは、優れた作品よりも個人として面白い作品を持ってきてもらい、参加者一人ひとりが作品に込める想いを伝え、全員で共有しました。作品の魅力をいろいろな角度から発見し、展示会のキャプション作りや展示方法のヒントやアイデアを得る時間になりました。

1回目　8／25開催
「たくさん作ったものを持ちよる会」

会場の机の上には、家や施設で保管されていた作品がずらり。作品を持参した人が一人ずつ思いを込めて作品を説明。聞く人たちは、気になった点や、素敵だなと思ったことをメモし、それを参考に作品の〝キャッチフレーズ〟を書き、説明した人にプレゼント。同じ作品でも十人十色の感じ方があり、個人では気付かなかった作品の魅力を発見する時間になりました。もらったキャッチフレーズは、展示会のキャプション作りにも役立ったようです。

2回目　9／16開催
「捨てられないものを自慢する会」

参加者がもちよった「捨てられないもの」のストーリーを聴き、素敵だな！と思ったことを表彰状に書いて渡すというワークショップ。表彰状をもらうという出来事は、作品だけでなく、創作に励む作家の日々の姿、創作を支える人の在り様をまるごと讃える時間となり、表彰状をもらいながら涙ぐむ人もいました。

3回目　10／1開催
「幻聴妄想かるたを楽しむ会」

日常の出来事や考えていることを材料に、読み札と絵札を作るワークショップ。展示会では、作品だけではなく、その背景にある作者や創作過程のエピソードも伝えたいという思いがありました。作品を「かるた」で表したら背景にあるエピソードも伝えられるのでは？そんなアイデアから妄想かるたを全員で体験。展示会初日は、会場でも妄想かるたのワークショップを開催し、一般のお客様にも参加してもらいました。

4回目　11／17開催
「ものを並べる会」

展示会前日。これまでのワークショップで蓄積した作品の魅力を表現するキーワードやメモを参考に、各自が自宅や施設でキャプションを手作りし持参。自分の作品を手に持ちながら、どう飾ったら一番魅力的に見えるか？試行錯誤を繰り返し、3時間4時間と納得いくまで展示作業は続きました。「もうヘトヘト……」と言いつつ、満足いく展示ができた！という達成感をみんなで共有できた搬入日となりました。

5回目　11／18・19開催
「目がものをいう会」

「それ、うちの息子が描いたんです……」。作品を見ている来場者に話かけるワークショップ参加者。展示会初日と翌日は、自分が展示した作品の前に立ち、作品ガイドにチャレンジしました。最初は、来場者への声かけに躊躇する様子でしたが、4人5人と続けるうちに、いろいろ質問をしてくるお客様も。ガイドする声にも熱が入り、ワークショップ参加者とお客様の間で、障がい者理解に繋がるコミュニケーションが生まれた手応えがありました。

◎キャッチフレーズを書いたり・書いてもらったりしたことで、色んなキーワードもらった。質問の糸口もできたし、自分でキャッチコピーを書く時にも作者の略歴で終わらず、親しみがわく内容を書くことができた。
◎ワークショップがあったからこそ、作品のこういうところもおもしろがっていいんだ！と思えて、展示する時の励みになった。
◎展示作業は、その場で半日悩んだ。お任せ状態で誰もアドバイスくれない……と思ってたが、最後は一人でやるしかない！と思って展示したので、完成した時は達成感があった。
◎自分たちで展示する機会があったことで、みなさんと話ができて楽しかった。障がい者アートで繋がり、ネットワークをつくることができたことが一番良かった。

6回目　12／8開催
「会をふりかえる会」

展示会が終わって2週間後、参加したみなさんと一緒にワークショップそして展示会を振り返り、感想を共有しました。感想の一部を紹介します。

映画上映　活弁士付き！

『阿賀に生きる』

11月18日　14：00～16：15
会場：高田世界館

バリアフリー活弁士
檀 鼓太郎（だん こたろう）

今年で築107年となる日本最古級の映画館「高田世界館」で、国内外のドキュメンタリー映画賞を総なめにした『阿賀に生きる』を〝活弁士〟付きで上映しました。サイレント映画の時代、ストーリーにあわせて映画の説明をしたのが活弁士。近年では、視覚障害者向けに映画・演劇・プロレスなどの場面解説を実況で行う『バリアフリー活弁士』という職業があり、今回は、その第一人者である檀　鼓太郎さんを招いて上映しました。

まちなか展示

11月2日～19日
展示会場：あすとぴあ高田1F

展示会のPRを兼ねて、高田駅近くの文化交流施設でプレ展示を開催。通りに面したガラス張りのホールに、段ボールに描かれた作品をピラミッドのように積み上げて展示しました。侍をモチーフにしたユーモラスな作品は迫力満点で、通りを歩く方々は、ガラス張りの向こうに何が置いてあるんだろう?と興味津々にホールの中へと足を運んでくださったようです。

ワークショップ

幻聴妄想かるたで遊ぼう！作ろう！

11月18日　11：00～／13：30～／15：00～
会場：旧今井染物屋

東京都の就労継続支援B型事業所「ハーモニー」に集まる人たちが、自らの幻聴や妄想の体験をもとに作った『幻聴妄想かるた』。当日は、来場された様々な方と展示会スタッフが一緒になって『幻聴妄想かるた』大会で遊んだり、参加者が自分の近況や体験を題材に、読み札や絵札を作るワークショップも行いました。

ライブペイント

11月19日　10：00～12：00
会場：旧今井染物屋

「自然を写す紙」をモットーに、表現素材としての和紙の可能性を探求している和紙作家と障害者のコラボイベント。描き手の保苅 彰さんは、幼い頃から一貫して〝侍〟をモチーフに絵を描き続けています。筆と墨で描く作品が多く、初めての挑戦となった和紙との相性も抜群で、次から次へと絵筆が進み、和紙とアール・ブリュットが融合した味わい豊かな作品が生まれました。

パフォーマンス

高田を巡る瞽女唄と踊り

11月23日　13：30～
場所：高田小町・旧今井染物屋

かつて上越の地で生活していた盲目の女旅芸人〝高田瞽女〟の風土や精神性を、瞽女唄と踊り二人の演者によるパフォーマンスで表現。展示会場である町家の中で、来場者と近距離で瞽女唄と踊りを展開したことで、「劇場などでは感じられない特別な雰囲気を味わいました」という感想もいただきました。

瞽女唄：萱森直子（かやもり なおこ）
「最後の瞽女」故小林ハルに師事、最後の弟子となる。同時に高田瞽女・故杉本シズにも教えを受け、長岡・高田両系統の瞽女唄を直接伝授された唯一の伝承者として後進の指導のかたわら全国各地で多数公演。

踊り：堀川久子（ほりかわ ひさこ）
1978年即興のための覚醒身体を求め、田中泯のワークショップに参加、師事。1998年新潟に移住。新潟を拠点に、場所に生きる踊りを模索。独舞を中心にワークショップをヨーロッパ各地でも展開。

コンサート

全盲のシンガー・ソングライターコンサート

11月19日　13：00～
会場：旧今井染物屋

佐藤ひらり
筑波大学付属視覚特別支援学校・高等部音楽科一年在学中。

2013年ニューヨーク・アポロシアターの音楽イベント『アマチュア・ナイト』に挑戦し、ウィークリー・チャンピオンを獲得した、新潟県出身の全盲のシンガー・ソングライター佐藤ひらりさんが登場。来場者の中には、ひらりさんの歌が聞きたくて展示会に来たという方も。2020年の東京オリンピック・パラリンピックで国会斉唱することが夢という彼女の歌声は、聴く人一人ひとりの心に染みわたり感動の空気に包まれました。

コラム

「今を生きていること」に気づく瞬間

長岡市立高等総合支援学校　教諭　峰村 恵利子

ジャン・デュビュッフェは「美術の正規教育を受けていない人々が他者を意識せずに創作した芸術」をアール・ブリュットと呼んだ。私のクラスの1年生の生徒たちも、描くことや作ること、あるいは踊るように体を動かすことを、まるで呼吸するように行っている。

Aさんが、授業そっちのけで大好きなＴＶ番組のセリフや県内各地の地名に書き連ねている。書き終わると、Aさんの大切なものが詰め込まれた透明なビニールバッグに入れられる。Bさんは、入学当初、慣れない学校生活への不安から教室でかたまるように動かないでいることが多かった。そんな時、Bさんは自らいらないプリントの裏面に、文字のようで文字ではない形を書き連ねていく。きっと、Bさんの作品は、Bさんの不安の形だ。

AさんもBさんも、学校ではルール通りに行動できず、「困った子」と言われることが多いが、アール・ブリュットの視点で見れば、「あらわす行為に没頭している」つまり、「今を生きている」。アール・ブリュットという概念があることで、改めて、子どもたちの人間としての魅力に気づくことができたことは、教師としての喜びであった。

インターンシッププログラム

11月17日～19日まで3日間のインターンシッププログラムを取り入れました。大学・短大含めて9名の学生が参加。県内だけでなく、東京や宮城の大学からも参加がありました。プログラムでは、展示作業や会場での来場者の誘導や作品説明、妄想かるたワークショップの進行サポートを担当してもらい、展示会を通して、福祉の可能性、アール・ブリュットの魅力を感じてもらえる機会となったようです。

参加学生から届いたお礼状より　※一部抜粋

今回インターンシッププログラムに参加し、作品の展示と来てくださった方々との交流を通じて、アール・ブリュットは本当に人と人とを近づけることができるものなのだと、実感しました。障害を持っている人も持っていない人も、芸術に興味のある人もそうでない人も、作品を通じて、なんかすごい！と思えるのがアール・ブリュットの魅力で、私もそう思った人間の１人です。今回の展示会では、そう思ってくださった方々を間近で見ることができ、とても嬉しく感じました。作品を作っているご本人様も、そのご家族も、そして何よりそれを理解し広めようとしているみなさまが、私にはとても素敵に見えました。今回の展示会を通じ、私自身が、まだ見たことのない作品をもっと見たいと感じましたし、アール・ブリュットの存在を知らない人にも是非知ってほしい、と心の底から思います。たくさんの笑いと感動をいただきました。貴重な経験をする機会をいただき、本当にありがとうございました。是非また機会があれば、みなさまと一緒にアール・ブリュットに関わることができたら嬉しいです。

展示会評価者の声

今回の展示会では、企画の方向性や展示会として正しい伝え方ができているか?について、客観的な評価をもらい今後の企画運営に役立てるという目的で、評価者を依頼し様々な視点から的確なアドバイスをいただきました。その一部をご紹介します。

展示会評価者の声

ダンサー　堀川 久子

作品はそれぞれに力作揃いだった。小さな毎日の作業が一つの作品になっていくことの素晴らしさが充分に出ているものであった。自分のこだわりでつくられているものが多いのだが、技術的にも優れていて驚いた。小さなことがきっかけで、それがひろがっていく強さがある。こういう作品がどんどん出て来ることはとても楽しい。素晴らしい。新しい地域からの参加もあり、また違った作品にも出会えた。

展示については、会場である『町家交流館高田小町』『旧今井染物屋』それぞれの特徴や展示の方向性がはっきり区別されていて良かったと思う。ただ『旧今井染物屋』の作品はワークショップに参加した方々が自ら展示したというが、どのように作品を選び展示の仕方を決めたのか、また自主展示に向けての「捨てられないものを自慢する会」などはどんなワークショップだったのか? ワークショップから自主展示までのプロセスが会場のどこかに表されていてもいいように思った。『高田小町』の障子を薄くしたようなしきりは、空間の広がりを感じさせてとても良かったと思う。展示されていた作品群はそれぞれとても力のあるものだったので、これらを丁寧に見ようとすると大変時間がかかる。なにかいい方法がないのだろうか?とも思った。

私達は作品群の何に感動しているのだろうか?けっして、障害者だからということだけではない。純粋さや集中力の高さだけではない。私達が見過ごしているような毎日のちょっとした変化がそこには散りばめられているということだ。結果を求めるような暮らしの中にない、幾通りもの道に出会いながら、その行為を獲得していっているその時間、過程がとても貴重なのだと思う。もっと人々にこの催しが知られていい。そしていろんな場所、民間のギャラリーや一般の学校などとのつながりができていったらいいなあと思う。

展示会評価者の声

高浜市やきものの里かわら美術館
教育研究課　学芸員　今泉 岳大

「生活」というキーワードで、作家たちが各々の暮しの中でどのような目的でどのように制作しているのかを辿りながら展示している。展示会場も、かつて人が「生活」をしていた町家を使用しており、建物の雰囲気を活かしながら作者の生活感や息遣いが聞こえるような展示がされていたのが印象的である。

『町家交流館高田小町』の展示室では絵画を掛け、またゾーニングする壁面に半透明の農業資材の不織布を使用した襖を模した建具や、足の細い展示台が使用され、障がいという重く考えられがちな要素を視覚的に明るく演出する意図が見て取れ秀逸である。「もちより作品展示会場」とされた『旧今井染物屋』は、靴を脱いで和室に設置された作品を鑑賞するというスタイルからか「生活」というテーマをより強く感じる展示である。県内の複数の福祉施設とワークショップを重ねながら展示をつくっていったという過程が開示され、関係者の盛り上がりや楽しさが展示に顕れている。このアンデパンダンを思わせる試みは、展覧会という形式が内包している「見せる側」と「見せられる側」の主従関係を問い直すと同時に、障がい者の芸術作品を取り巻く評価の問題を提起しているように思われた。

関連イベントだった全盲のシンガー・ソングライターのコンサートは、彼女の「新潟出身」「全盲」という属性での関連事業であると思われるが、美術展示やその他の関連事業に比べて工夫が少ないように思われた。コンサートとしては素晴らしいものであった。

ひろめる
公開オーディション

あしたの星★

創作活動の多様性

NPO法人アート・キャンプ新潟と共催でパフォーマー公開オーディション『あしたの星☆』を開催しました。センターとして、舞台芸術に取り組むのは今回が初めてでした。

8月にアートキャンプ新潟の近代表と、何かもっと障害のある方の創作活動の幅が広がる取り組みをしたいよねと雑談をしてから、事業の実施まで4ヶ月。協力してくれる仲間が徐々に増え、こんなに大きな動きになるとは思いませんでした。

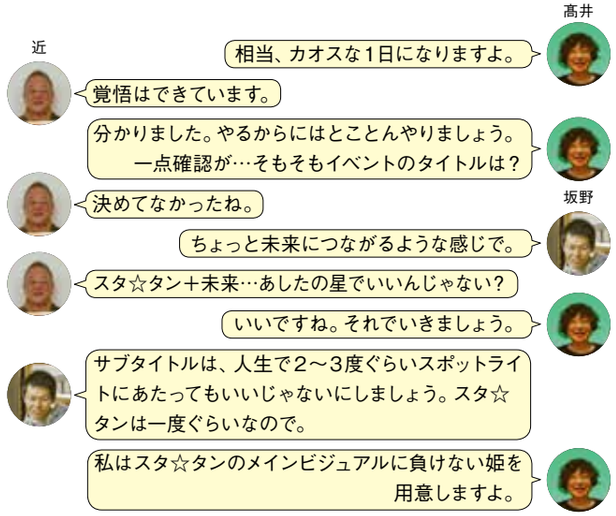
雑多な音楽の祭典　スタ☆タン‼2

たまたまインターネット上で見つけたチラシ。その名も『雑多な音楽の祭典　スタ☆タン‼2』。静岡県にある認定NPO法人クリエイティブサポートレッツさんが実施している公開オーディションです。

圧倒的なそのチラシのビジュアルに一瞬にして心が奪われました。一目でこれは凄い！、全てを受けてとめる力があるイベントだと分かりました。そして、自分たちがやりたかったのはこれだと。近代表から担当者の佐藤さんに、この企画を少し参考にイベントの企画を行いたいと打診をしてもらいました。佐藤さんからは、しばしの沈黙…が続くことも無く、即答でどんどんやってくださいと快諾をいただきました。

今までにないつながり

さて、いざ実施する舞台芸術の方向性が決まったところで、我々はまったくの素人でした。やるからにはイベントとしてしっかりと舞台演出のクオリティを求めたいところです。そんな時に出会ったのが、ラ・LaLa Factoryの高井代表。高井代表は、自らアーティストとして活躍する傍ら、ボイストレーナーや音響・舞台の演出、アーティストのプロデュースまで行う芸能のプロです。そんな方を前に、近代表とスタ☆タン2のチラシを見せ、こういったイベントをやりたいと打診をしました。以下、高井代表とのやりとりです。



あしたの星☆

こうして企画が固まった『あしたの星☆』。新潟県庁を通じてチラシのデータが、新潟県内の指定障害福祉サービス事業所に流れました。それと並行して、新潟医療福祉大学の西川准教授と学生の方々、また愛宕福祉会ドリームカレッジ国兼さん、新潟市の全面的な協力のもと当日の運営体制も固めていきました。

申込締切が近づくに連れ、申し込み窓口になった近代表には問い合わせが殺到しました。

「俺、歌うんで。それじゃ。※氏名・連絡先不明」

「かけもちで、3回ステージに立ってもいいですか？」

「ありのままの生き恥をさらします。」

「審査員の方に会いたいので出演します。」

…などなど問い合わせからして、とてもユニークでありカオス感がただようものが多かったです。

結果として、40組のエントリーがあり、うち18組の出演が決まりました。

オーディション

当日は、出演者・参加者あわせ150名の方から来場いただきました。歌、ピアノや打楽器の演奏、コント、ダンス、独舞など本当に独創的なパフォーマンスが繰り広げられました。会場全体も、じわじわと自然と湧き出る笑いや感動に包まれ、よくわからない一体感が生まれていました。言葉では表現することが難しい素敵な空間で、演者も観客も一緒に楽しむことができたのではと思います。

見事、グランプリを勝ち取ったのはダンスをしたエンジェルスター&レインボー。ダンスもさることながら、演じたあとのものまねも高評価を得たようです。

今回の公開オーディションを実施して分かったことは大きく3つあります。一つは潜在的に舞台を通じて自分を表現したいという方がたくさんいるということです。今回40組もの申込があったことがその表れです。

2つ目は申込の際の配慮。申込用紙を一般的なものにしてしまったため舞台には立ちたいのに、申込用紙に必要事項を書けないという方がたくさんいました。如何にサポートしていくかが次年度以降の課題となります。

3つ目が、今回の企画のように不真面目なことをとことん真面目にやってみることで、面白い事業になることもあるということです。。次年度はサブタイトルを人生で3～4度ぐらいスポットライトに変えて実施したいと思います。

概要
【日時】平成29年12月23日（土・祝）
【場所】新潟市北区文化会館（新潟市）

来場者数　150名

コラム

ラ・LaLa Factory代表
髙井晶子

「別に障がいの人を遠ざけている訳ではないんです。どう手を差し伸べれば良いのか解らない。障がいの方も壁を作らないで、一緒に出来る事を…」。私が主催していたお茶の間うたごえ広場で60代の私の生徒のつぶやきからそれは始まりました。今回の関りで弊社スタッフも障がいに対するイメージが一新。それだけでも参加した甲斐がありました。坂野さんと近さんの思いにただただ感動！あしたの星☆、これから凄い展開になりますね。

《大学とのコラボ企画》

私たちの街 新潟のアール・ブリュット展覧会

昨年7月、初の試みとして大学との共同企画で展示会を開催しました。オファーしてくださったのは新潟青陵大学・新潟青陵大学短期大学部。新校舎竣工の記念イベントとして、「地域の福祉と子育て×アート」をテーマに企画されたもので、有志学生を募り実施。作品の展示作業だけでなく、施設を訪問し実際に創作活動について学ぶ機会を設け、そこで取材したことを基に展示作品のキャプションも学生自身が作るという全4回のプログラムでした。

《作品展示》

展示会場が大学校舎という珍しいケースでしたが、一般公開の展示会には大学関係者だけでなく、職種・年齢問わず様々な方にご来場いただきました。来場者アンケートには、学生の思いが詰まったキャプションを評価するコメントも多数寄せられました。

《関連セミナー&ワークショップ》

展示会の関連イベントとして、7月12日には「アール・ブリュットってなあに?~その魅力と楽しみ方~」を開催。学生の他、会社員や看護師、主婦など一般参加も多く、定員の50名を超える状況に。ワークショップでは、作家の家族や施設職員に作品を持参してもらい、各テーブルで作品に対する想いや背景を語ってもらいました。聞き手となった参加者には、作品自体の魅力に触れてもらうと同時に、作家の周りの人たちの〝熱〟にも触れてもらう貴重な時間となりました。

アール・ブリュットとは何かを学ぶ

5月19日　16:00～17:45

初回は、アール・ブリュットの説明や展示会を開催する目的の他、作品の事例紹介やキャプションの役割も学びました。実際に施設に出向いて作品の聞き取り調査をする時に、どんな質問をしたらいいのか？ワークショップ形式で学びました。

創作現場を見てみる

5月27日　13:00～16:00
訪問施設：かりん・青松ワークス・麦っこワークス
6月9日　16:10～18:40
訪問施設：みのり園・結屋・さんろーど

この日はチームに分かれて6つの施設を訪問。創作の現場を見学しながら、学生一人ひとりが作品ができるまでのストーリーを聞き取り調査。聴けば聴くほど作品や作家への愛着が生まれてきたようでした。

作品を表現してみる

6月28日　16:00～17:45

施設訪問で聞き取った内容や撮影してきた写真を材料に、作品のキャプションを作ってきた学生たち。そのキャプションを、お互いに読みあって感想を共有し、キャプションの意図が相手に伝わっているか確認。納得いくキャプションへ進化する時間でした。

実際に展示を行う

7月8日　8:00～17:00

翌日からスタートする展示会に向けての展示作業。学生が作った写真入りのキャプションも展示。ブラッシュアップされたキャプションは、1枚には収まりきらずレポートのような読み応えある内容に。学生の伝えたい！という思いが溢れる出来栄えでした。

概要
【日時】平成29年7月9～16日　9：00～18：00
【会場】新潟青陵大学・新潟青陵大学短期大学部
新校舎1号館2階プレゼンサークル
【主催】新潟青陵大学・新潟青陵大学短期大学部 地域貢献センター
新潟県アール・ブリュット・サポート・センター NASC

来場者アンケート

- 大学ロビーで、しかも新校舎のスペースでの開催に興味津々で来場した。どの作品も個性に溢れていて無限に広がる可能性を感じた。
- 作者のことをまとめたレポートを読んで楽しかった。学生たちがそれぞれ丁寧に、作家と一緒の時間を過ごしたんだなとほっこりしたし、希望を感じられた……
- 大学生の言葉に、その「作品」だけでなく、その「人」への興味や愛着を感じられてとても良かった。

作品の調査・発掘 ～長岡市～

センターの主催事業として平成28年11月に開催した「アール・ブリュット展ｉｎ長岡」は、長岡市内の障がいのある人を支える施設職員や家族の方々にとって、日頃の創作支援を見つめるきっかけとなりました。

長岡市ではこうした動きをさらに着実なものにし、さらに障害者による芸術文化活動を核として、障害ある人の生きがいや市民の障害者への理解促進につなげることを目的に、平成29年度の新規事業として、長岡市内の障害者施設などへの作品調査・発掘を決定。調査スタッフの依頼をＮＡＳＣが受けました。

調査は、２０１７年7月下旬から8月上旬にかけて、生活介護や地域活動支援センター、総合支援学校の8か所を訪問。長岡市の担当者や、調査発掘のノウハウを学びたいという地域の障害者施設の職員も同行。この時に発掘した8名の作品は、11月に開催した『アール・ブリュット展ｉｎ上越３』で展示しました。

作品調査・発掘　実施概要
【実施日】平成 29 年 7 月 26 日・27 日・8 月 3 日
【訪問施設】地域活動支援センターキッズサポートつむぎ・桐樹園・リハビリセンター王見台
地域活動支援センターピュアはーと・越路ハイム地域生活支援センター・かきのみ園
長岡市立高等総合支援学校（高校生）・長岡市立総合支援学校（小・中学生）

コラム　アートを通しての相互理解 ～長岡市の取り組み～

長岡市福祉保健部 福祉課障害活動係
係長　五十嵐正史

平成28年11月、長岡市内で初めてアール・ブリュット展が開催されました。同展には2日間で８４０人が来場し、市民の皆さんから大きな反響がありました。

同展の開催がきっかけとなり、長岡市としてアール・ブリュットの取り組みを開始し、本年度、作品の調査事業を実施しました。ＮＡＳＣのスタッフの方、市内の社会福祉法人の職員有志とともに障害者支援施設や市立高等総合支援学校を訪問。作者の方とお話をする中で、作品が多くの人の目に触れ、評価されることが、ご自身の創作意欲につながるということを実感しました。楽しみとして創作する「作品」が「アート」として昇華していく過程の一端を垣間見た思いでした。

これからも、アール・ブリュットの裾野が広がり、すばらしい作品が何気ない日常の中で見出され、アートを通して、作品が生まれる背景や作者の暮らしぶりを知る機会が増えていくことを願っています。

アールブリュットin小千谷 ―手前味噌の会― ＜参加型展覧会＞

福祉に関する情報交換を行う〝小千谷市フォーラム〟において、アール・ブリュット展を同時開催したいとの依頼が、フォーラム実行委員会からありました。展示会の目的は二つあり、一つは小千谷市に暮らす障害ある人の創作発表の機会通して、社会との関わりと持つこと。もう一つは展示会を通して福祉関係者と当事者家族らのネットワークをつくることでした。その為、県内の優れた作品をセンターが紹介する形ではなく、参加型のワークショップを通して、自分たちの地域にあるものごとを見つめ、展示会をつくっていく形で事業を進めていきました。

5月から9月の間に合計3回のワークショップを企画し、障害とアートに関するのレクチャーから実際に作品の魅力をどのように伝えられるかなどを話し合いました。

成果としては、展示会を一緒に作る中で福祉関係者や家族だけではなく、美術に関心のある一般の方も参加交流する機会となりました。また、自分たちの身の回りにあるものから作品を見出す中で、日常にある魅力を見つめ直す機会となりました。自分たちの持っていること、できることから生まれた丁寧な展示会となりました。また、初めて展覧会に参加するという作家ほとんどであり、地域にとって新しい試みとなりました。

参加型展示会　実施概要
【実施日】平成 29 年
5 月 28 日 13:30-15:00　障害とアートに関するレクチャー
6 月 23 日 19:00-21:00　作品を自慢する会
8 月 22 日 19:00-21:00　作品の魅力を引き出すキャプションづくり
9 月 12 日 15:00-19:00　展示会搬入
【参加者】10 名

『灯の祭典inせきかわ』におけるアール･ブリュット展

日時：平成30年2月4日（日）
場所：国指定重要文化財渡邉邸（関川村）

関川村および関川村社会福祉協議会では、平成28年度に関川村地域福祉計画・関川村地域福祉活動計画（以下計画とします）を策定し、①移動支援、②居場所づくり、③観光と福祉の3つを村の福祉を推進していく上での柱としました。

今回、計画に位置付けられている『観光と福祉』の一環で、村のシンボルである国指定重要文化財である渡邉邸において、アール・ブリュット展を開催してほしいと依頼があり、センターで作品の選定や展示什器の用意などの準備を行いました。

国指定の重要文化財ということもあり、暖を取ることができずマイナス4℃の中での展示作業となりましたが、会場が元々持っている魅力と作品がマッチした空間になりました。当日は、同会場で手話ソングによるオープニング、篠笛のライブやお茶会などが行われました。会場の向いの村役場の駐車場では飲食ブースが設けられ、村内外から多くの方が集うイベントになりました。

イベントのフィナーレは、スライランタンの打ち上げ。雪原の中、夜空に輝くスカイランタンはとても幻想的な光景でした。

今回、地域のシンボルである会場で展示を行いましたが、手伝ってくれたスタッフ、来場者からは会場に対する誇りを感じました。今後も、より地域と密接に関わっている会場で展示を実施してみたいと思いました。

小さなアール・ブリュット展i n上越警察署

日時：平成30年1月4日（木）～11日（木）　場所：上越警察署

「多くの市民の方に、障害のある方の創作活動の魅力を知ってもらいたい。それ以上に、署員に対し福祉の支援を必要とする方への配慮を意識づけしたい」。

上越警察署よりいただいたオファーにより、警察署内での展示会が実現しました。警察署内での展示会は新潟県内では初の試みでした。

運転免許証の更新が特に多い、1月の上旬に展示したこともあり多くの市民の方が会場に足を運んでくださいました。また、署員の方が自発的に当初指定された展示位置を変更して警察署の入り口正面に作品を移動してくれました。より多くの方に、作品を見てほしいという思いから展示位置を調整してくださったそうです。

公共機関からの展示の申し出は非常に嬉しいことでした。多くの方が集う場での展示会、今後も開催していきたいです。

『地域福祉フォーラム・i n たいない』におけるアール・ブリュット展

日時：平成30年2月24日（土）　場所：胎内市産業文化会館ギャラリー

胎内市役所よりフォーラムの開催と同日に展示会を開催してほしいとオファーがありました。当初は新潟県内の著名なアーティストの作品を展示するという構想でしたが、センターより展示会開催後に地域に何か残る展示会を開催したいと提案しました。

具体的には、展示会前に一度胎内市内の福祉関係者を集めた研修会・ワークショップを開催し、各施設から持ち寄ってもらった作品を中心に展示したらどうかと提案しました。

申し出が受け入れられ、展示会前に研修会とワークショップを行い参加施設に作品の出展をお願いしました。

当日は、胎内市内から多くの作品が集まり、紹介文まで作成してくれた施設もありました。

フォーラムの参加者も含め多くの方から展示会場に足を運んでいただき、また開催してほしい、面白いなど様々な感想をいただきました。これを機に、もっとこのギャラリースペースを活用したほうが良いのではという意見もありました。

フクシゴトフェス!!

一般社団法人FACE to FUKUSHIよりインターンシップフェアの場で、ARTブースを設けてくれないかと依頼がありました。
そこで、ライブペイントとミニ展示会を開催することにしました。
ライブペイントでは、新潟県加茂市出身の新井里沙さんから花を描いてもらいました。大きな紙に絵を描くことは、里沙さんにとってもこれまでにない経験でしたが、迷いなく2枚の花が瞬く間にできあがりました。
新井さんの描く様子を見ていた学生からも驚きの声が多数あがっていました。

日時　平成29年8月11日（金・祝）
場所　文京学院大学本郷キャンパス（東京都）
参加者　223名

また、ミニ展示会では新潟県長岡市出身の五井雅人さんの作品をはじめ絵画やダンボールでできた作品の展示を行いました。
五井さんが作った大小様々な紙を折りたたみ切られた穴の開いた紙が、規則正しく並べられている光景を見て、学生からはビル群に見えるという感想をもらいました。
福祉とアート。ともにつかみどころのないものですが、実は両方とも地域には欠かせないもの。見えないところで、地域の風景を彩る分母になっている。そんなことを、これから福祉を目指す学生に伝える場になったのではと思います。

コラム

まき福祉会　近 奈々恵

一つの作品を描きあげるまでの時間の中で、新井里沙さんの様々な表情を目にすることができた。会場のドローンに一時的に驚きの反応を示したものの、それ以外は、迷いのない力強いタッチで集中し、作品に思いを込め続けていた。
ライブペイントだからこそ見ることができたクレヨン使いや、2つの作品に共通していた色の塗り方を目にすることで、今後も新井さんの作品づくりに注目していきたいと思った。

アート×コミュニケーション

日時：平成30年2月17日（土）～19日（月）
場所：新潟市東区プラザ

新潟市から依頼を受け、アートとコミュニケーションをテーマにしたイベントを開催しました。イベント期間中は、NPO法人アートキャンプ新潟による展示会や創作の場、ダンスワークショップも同会場で開催され非常に賑やかな3日間となりました。また、講演会・トークセッションでは参加者だけでなく登壇者も含めた情報保障の事前の準備を入念に行いました。誰もが楽しくアートを楽しむために情報保障の必要性を再認識するきっかけにもなりました。

展示会

上越市で開催したアール・ブリュット展in上越3の巡回展という形で開催しました。展示什器として新たにエアベッドやタイルカーペットを用いて、より日々の生活が透けて見えるような展示を行いました。多くの学生がボランティアとして参加し、展示を楽しみながら障害のある方の創作活動の魅力を知るきっかけとなりました。

映画上映

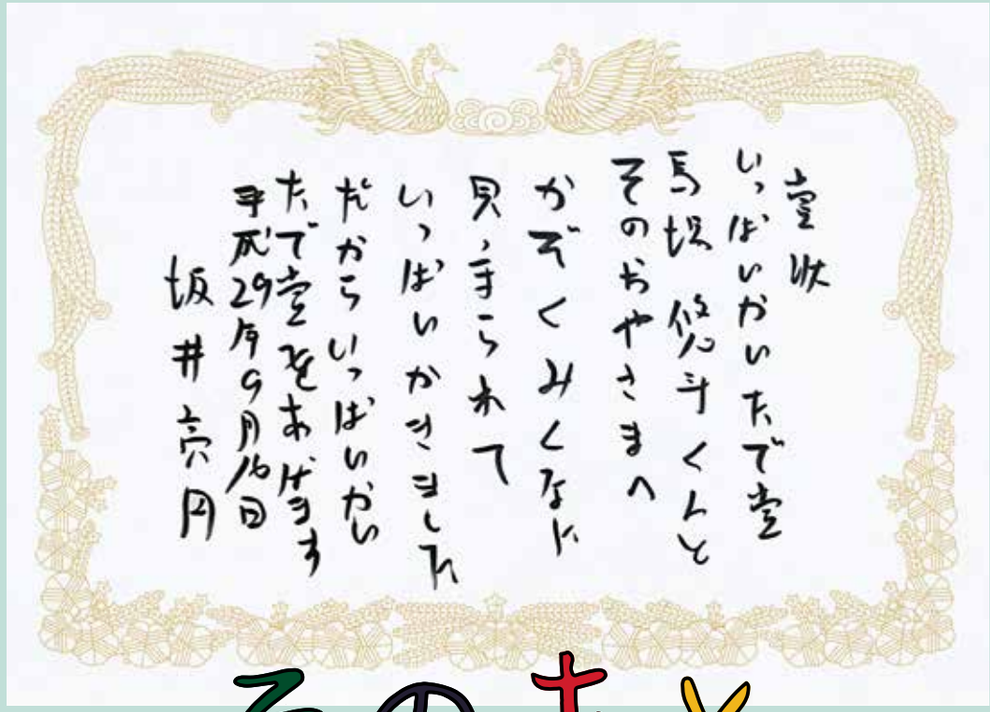
映画『LISTEN』の上映を行いました。映画『LISTEN』は、『聾者の音楽』を視覚的に表現したアート・ドキュメンタリーであり、当事者も多く来られていました。当日は牧原監督も来場され、コミュニケーションアプリの『UDトーク』の体験も行いました。

講演会

ユニバーサルデザインアドバイザーである松森果林さんをお招きし、講演会を開催しました。松森さんは、小学四年生で右耳を失聴し、左耳は少しずつ聴力を失い高校生で完全失聴しました。そんな状況の中で、同じく聞こえない方が手話でコミュニケーションを行っている姿を見て手話を習得する決意をしました。『聞こえる世界と聞こえない世界』の両方を知っている松森さんだからこそ、語ることのできるコミュニケーションの多様性についての話から多くの学びをいただきました。

シンポジウム

『楽しく生きるには』をテーマに、松森さん・牧原さんと福祉の実践者を交えディスカッションを行いました。コミュニケーションを含め、社会にある様々な障壁をなくしていくために何が必要で、何をしていくべきか議論が交わされました。



そのあと
インタビュー

インタビュー

母としての心の変化と大きなチャレンジ

話し手　馬場 友絵
聞き手　菅井 豊子（東海・北陸ブロック障害者芸術文化活動広域支援センター）

アール・ブリュット展in上越3に出品した馬場悠斗さん。会場内には、壁も畳の上も悠斗さんの作品で埋め尽くされた部屋が出現。この展示をしたのは母親の友絵さん自身でした。昨年度の展示会では、出品するだけで自ら展示はせず、来場者として展示会を見に来ていた友絵さんが、今回は自らの手で息子の作品を展示し、キャプションを作り、お客様への作品説明もすることに……。「依頼を受ける側」→「発信する側」へと大きなチャレンジをした友絵さんに、今振り返って思うこと、自身の変化についてお聞きしました。

馬：馬場友絵
菅：菅井豊子

家中がアトリエ

菅　こうして馬場さんのお宅に入ってみて、ホント家中が悠斗さんの絵、もうすごいことになってる！

馬　だんだん侵食していって、初めは自分の部屋だけって言ってたのに、中学部の夏休みの時に、描いては貼る、描いては貼るにハマっていて、自分でどんどん貼ってアッという間に壁がそれで埋まったんですよ。

菅　悠斗くんの部屋の中は、天井もそうだし押し入れの中も描いてるじゃないですか！

馬　そうそう、押し入れの中は布団があんまり汚れるから1回張り替えてるんですよ。だから、あれ1枚剥がすと何か出てくると思いますよ。小学校中学年くらいまで、押し入れの中に入ってね、天井まで描いてたんです。一番最初に描いたのは年長の時。全裸で壁に描き始めたんですよ。5歳の頃かな。描き始めちゃったら、ダメですね。

菅　もう描き始めちゃったら止まらない？

馬　止まらなくって、1を描きはじめたらもう諦めるしかないって感じ。1から12とか、1から6

までは、まとまりで描くので1を描かれたら、もう絶対何が何でも様子をうかがいながら必ず描き上げていますね。だから、もう1を描かれたら私の負け。その時やめさせても、いつかやられるな、しょうがないなって。それの繰り返しでここまできちゃった感じ。壁がどんどん埋まってきたら、もういいよって感じだったけど、それまでは一応止めてはいたんですよ。止める止めない、その葛藤はありましたね（笑）。

描くという行為

菅　描く行為に対しては怒るわけではなく？　どうしても止めさせるわけでもなく？

馬　私はやらせたかったっていうか、描くのを止めさせたくはなかった。クレヨンを取り上げることもできたと思うけど。クレヨンで描きはじめる前は、ただモノを並べるとか棚のモノを全部ひっくり返すとか、そういう私の中ではあまり意味のないようなことだった。本人は意味があったのかもしれないけれど。紙に向かって描いたり、目的をもってやってる感じがすごくうれしかったんですよね。また色使いがすごくきれいで、これは続けさせたい！と思った。

菅　ホントきれいで、悠斗くんはこの色使いをどうやって自分の中に蓄えたのかなって？

馬　小さい時に見ていた『ピングー』っていうアニメで、お兄ちゃんが好きで見ていたVHSのジャケットがあって、そのジャケットの色と数字の組み合わせなんですよね。

上越展での大きなチャレンジ

菅　11月の上越の展示会では、この悠斗くんの部屋を再現した感じでしたよね。実際、ご自身で展示してみてどうでしたか？

馬　はじめてのことだったので、ワークショップも何回もあったけど、どうやって展示に繋がっていくのか分からなくて不安で一杯だった。でも自分で展示するってことだったので…

菅　展示会までのプロセスづくりのワークショップ、もう毎回出ていただきましたよね。

馬　結果的にワークショップに出たことで、自分の考えもまとまっていって、あんな風に展示できたのかなあ……とも思いますね。

菅　お母さんが作ったキャプションもすごくよくて、読んでジーンとしちゃいました。

馬　あれ、悠斗の生まれ年が一年間違ってたんです。そういうところが、あたしやっぱり抜けてるなぁと思って（笑）。

菅　でも、お母さんがどれだけ悠斗くんを愛しているのか愛が溢れてましたよ。

馬　障害をもって生まれてきて、ある時期まではずーっと、普通だったらどうだったろうと考えたりしたことがあったんだけど、どこが境目かわからないけど、全然そういうことを考えることがなくなったんですよね。そういえば、昔そんなこと考えてたなと思って。本当の意味で受け入れられたんだなって。こうやって展示していただいて、家族とか知り合いじゃない第三者から「わ〜凄いね！」と感心してもらえて。今まで、どこへいってもずーっと謝り続けてきた歴史があるんで。どんだけ謝って歩いたかわからないくらい。だから〝認めてもらえた〟ってのはすごくうれしかった。だんだんそういうことが増えてきて私自身が変わってきたのかな。

菅　展示会への出品も、今までは作品の受け渡しだけでしたけど、今年はお母さん自身が展示をして、キャプションも作って、お客様への説明もして、すごいチャレンジでしたね。

馬　まさかそこまでやらされるとは思ってなかったんですけどね。すごい戸惑いましたね（笑）。大変だった分、やりきった感があります。

菅　悠斗くんの母親として、お客様に直接作品を説明するって、どんな気持ちでしたか？

馬　すごい照れくさい感じがしましたけど、お客さんの反応も様々で、本当に感心していろんなことを向こうから聞いてくださる方もいたし、全く逆で「あ〜そうなんですね〜」ってサラッと終わる人もいて、温度差は凄く感じましたね。

菅　「私、母なんですけど……」って、積極的にお客様に話かけてましたよね。見ず知らずの人に話しかけるって、勇気いりますよね。

馬　ホント、今までそういうことなかったし。

菅　まさかお母さんが作品の説明してるなんて、お客様もびっくりしてただろうし、もしかしたら悪いと思って本当の感想を言えなかった人もいたかもしれないし、いい経験ができましたね。

今後のチャレンジ

菅　チャレンジと言えば、インスタグラムも始められたんですよね！

馬　9月からインスタグラムを始めて、同じように障害を持ったお子さんのお母さんと繋がったり、投稿見たりして、自分でプリントして商品化してバッグ作って売ってるとか、いろいろ見てたら、なんか面白そうだな、そんなこともやってみたいなとか。そう思うようになりました。

菅　お母さんが積極的に自分から発信してる印象があります。受け身じゃなくて。

馬　やるまでに時間かかっちゃうスロースタートなんですけど、何かやりたい！っていう思いはあるんですよね。まだ形にはなってないけど、でもインスタとかで自分から発信するっていうのが第一歩になってるのかなって。それで実際に、面白がってコメント下さる方もいるし、応援してもらってる感じがうれしいですよね。

インタビュー

新しく見えてきた、暮らしのものごと

話し手　五井雅人 父・母 ・ 鈴木 裕平（みのわの里 ゆうあい生活支援 課長）
聞き手　角地 智史（東海・北陸ブロック障害者芸術文化活動広域支援センター）

家庭の中で不要になったレシートやチラシにハサミで穴をあける行為を続けていた五井雅人さん。家庭でも福祉施設でも当たり前の行為でしたが、昨年度初めて展示会へ出品したことをきっかけに、県内外から展示会への出品依頼があるなどの反響が。展示会を通して五井さん自身やご家族、福祉施設職員さんの間でどんな変化があったのかお聞きしました。

父・母：五井雅人 父・母
鈴：鈴木裕平
角：角地智史

好きなことを続けられる形

角　五井さんの作品については鈴木さんをはじめ施設の職員の方からは色々とお話聞いているのですが、本人やご家族の方からも直接お話を聞きたくて。まず、どんな経緯で紙を切り出したのかなどをお伺いしたいと思います。

父　覚えていないよね。

母　小さいころハサミが大好きで。

父　折り紙で（切ってた）…。

母　その前に髪の毛切ってた。眉毛も睫毛も。危ないから持たせても大丈夫だよと。

角　やっぱり髪に興味があるんですかね？

母　髪の毛ではなくハサミですね。途中でやめましたけど手を切ってたこともありますよ。跡も残っています。

角　ハサミで切るって対象は、どうやって今のようなかたちになったんですか？

母　オアシスを利用した時に管理者の方がよく見てくれて。一週間のリズムを作ってくれたんですよ。その施設は月・水・金と通っていて好きなことをさせてもらえてたんですが、そこで折り紙を教えてもらって。それから切り始めたんです。最初は凄く綺麗な飾り切りだったんですよ。素敵な模様で。

父　折り紙もこだわりがあるのでいっぱい買いました。

母　手も早いし、几帳面で。クリアファイルに入れていても切るようになってしまい（笑）。

父　今はあまり折り紙は切らなくなったよね。

角　切る対象が変わったのはいつ頃からですか？

母　『ゆうあい』に通いだしてからでしょうかね。

鈴　自分もいつから切り出したかはまったく記憶になくて。

母　そうでした。きっかけは家で紙を切ったんだ。これは切っても良い紙だよと置いてあったのを切り出したんです。

父　レシートを切ったりね。

母　うかうかしていると大事なクーポン券も切っちゃう（笑）。彼の活動として無理なく続くことがこれだったのかな。

角　丁度、『ゆうあい』に通うタイミングで切る対象が変わっていたんですね。

母　たまたま。『ゆうあい』で褒めてくれたんじゃないですか？切ったものを。

鈴　いや、うちですか。確かに他の職員が工作の時間に上手だねと言っていた気がしました。

父　それが嬉しかったんじゃないかな。

鈴　本当にあっという間に器用に切っちゃうんですよ。

つくったものを渡すこと

角　僕は五井さんの自宅で切った紙を施設へ持っていくというところに、面白さというか魅力を感じます。人にもっていくってことはこれまでに、紙以外のモノもあったんですか？

母　ないかな。基本的にあまり見せたがらないので。持って行って見せようと思っただけでも大したものだと思います。そう思わせる『ゆうあい』さんが凄いなと。

鈴　いえいえ（笑）。

母　朝、送迎のバスに乗るときに早い日だと午前6時50分から待ってますよ。鞄と水筒とチラシと（笑）。

父　作品はよっぽど大事なものみたいで、待っている間にポロっと落としたらギャーッと。

角　やっぱり本人にとって大事なものなんでしょうかね。

母　そうみたいですね。他の施設にも持っていったようで、一時で終わりました。

父　喜んでもらえなかったんですね（笑）。

母　富山県高岡市での展示会にも、車中で大事にチラシを抱えていました。

角　私も当日会場にいたのですが、スタッフの方から五井さんが追加で作品を持ってきましたと聞かされました（笑）。

スポットライトが変えるもの・こと

角　2016年に長岡で初めて展示会に出展されましたが、まず最初に作品が展示された時の感想をお聞きしたいと思います。

母　最初は長岡市での展示会でしたよね。凄く綺麗に飾ってもらって。ゴミだと思っていたのに（笑）。それが正直なところ。

父　ライトを当ててもらって、紙切れがあんなに輝くなんて。広くスペースもとってもらいましたし。

母　本当に本人は嬉しそうでした。凄いなと思う作品に囲まれて。こんなのでいいのかというのが私たちの感想（笑）。でも、本当に綺麗でした。飾る人によってこんなに違うものかと。飾る人のセンスにびっくりです。

角　五井さん本人が見て、どんなリアクションでした？

母　喜びにもあまり表さないのですが、創作意欲が湧いてきたようで。

父　量がかなり増えましたね（笑）。

母　そのあとは大事なものを結構切られましたよ（笑）。弟の学校に出さなきゃいけない書類とか。テストなんかもことごとく切られて。

角　ゴミ箱からというルールよりも、切りたいという創作意欲が勝ったと（笑）。

父　『ゆうあい』に持っていくチラシも増えたと思いますよ。

鈴　増えましたね。並べてくれるんですけど、並びきれる量じゃないですね。毎回じゃないんですけど。一枚ずつ並べてくれます。

角　一枚ずつですか。展示の方法と同じですね。良い面、悪い面含めて展示を通じて本人に変化があったのですね。

父　弟もお兄ちゃんの作品が評価されたことは嬉しかったみたい。

母　それが一番大きいかも。私たちはそんなに変わらないけど。

父　本人は障害があって、やっぱり弟からするとどこか馬鹿にするところがあった。

母　嫌いじゃないんだけど、弟でいたくないという思いが見え隠れしていましたね。家の中では大事にしてくれるけど、外に出たら他人でいたいから、例えば学生の真ん中の子は学齢期でずっとお兄ちゃんと一緒で。卒業式でひっくり返ったり、ああとかううとか言うわけですよ。恥ずかしくて。3番目の子は年が離れているのでそうでもないんだけど真ん中の子はやっぱり恥ずかしかったみたい。ひた隠ししたかったんでしょうね。作品を展示することが分かった時も「あのゴミが？」が第一声。出展にあたって謝金をもらったことも分かって、創作活動を邪魔することもなくなりました。

角　職員の鈴木さんの目からするとどんな感じに映りましたか。まずは展示会当日のことと、もう一つは展示会後の変化についてお聞きしたいです。

鈴　うーん。そうですね。創作は施設でやっていないのですが、まず持ってきていただく量が増えましたね。あとは役割を色々とやってくれるようになりましたね。配膳当番とか前からやってくれていましたけど掃除も。最近は除雪も。高齢者の生活支援事業をやっているのですが、除雪はやれる人が限られていますね。やってくれるようになったのは展示会の後だと思います。素材集めも活発になりましたね（笑）。

続けていく中で見えてきたもの

角　今年度は5回続けて展示会に出展してもらって、自分が知っている作家の中でもずばぬけて多いのですが、展示を重ねることで、何か影響といいますか変化はありましたか？

母　良いことしかないよね。

父　うん。

母　お出かけすることが増えました。本人は楽しくないことだと外に出ても車で待っているという感じだったので出かける機会も自然と減っていったんですよ。

父　小さいころは丘陵公園や海にもよく出かけていったんだけど。20歳を超えてまで行くところでもないし。

母　展示会は出かける理由になりました。仙台も日帰りで行きましたし。

鈴　兄弟で一緒に展示会を見にいったこともあるんですか？

母　富山県も上越市も行きましたね。

角　施設側の変化はどうでしたか。

鈴　五井さんの作品が取り上げられているので、職員の目線が変わりましたね。なんだろう。五井さんの作品は紙切れなんですけど、例えばですけど他の利用者のやっている面白い行動や、年始に書初めをしたのですが面白い字に興味を示したり。昔だったら手添えでうまく書かせようとしていたんですよ。今年は本当に自由奔放に書いてもらって、凄く味のある字がそろいました（笑）。すべてじゃないですけど、変わった部分ですかね。

鈴　また、髪の毛を結んだものを職員が見つけたのもそれがきっかけかなと。

角　展示会後に鈴木さんから五井さんの新作が見つかりました！とお電話頂いたのを覚えております。髪の毛の話、ぜひきかせてください（笑）。

鈴　気になるんですよね（笑）。

母　自宅でもこのソファで結んでいるんですよ。

角　昔は嫌でね。私の髪の毛しか結ばないんだもん。

角　施設では発見したのは最近とのことですが、この髪の毛を結ぶという行為も小さな頃からやっていたんですか？

父　やってましたね。

鈴　福祉の現場では、時にはキツイ場面もあるわけですよ。そんなときに五井さんのこの髪を結んだ作品を見つけるとホッとするんですよね。ささやかな楽しみになっています。

角　今回、鈴木さんは長岡での展示にも関わったと思うのですが、髪を結んだ作品についてどう感じましたか。もっと具体的にいうと展示してもいいものかと悩みませんでしたか？

鈴　お父さん、お母さんを目の前に大変失礼なのですが、どうなんだろうという思いはありました。そもそも展示の許可をいただけるかと。凄いなとは思いますが、どう展示していいか分かりませんし、モノがモノですから（笑）。

母　所詮、どっちもゴミですし（笑）。

鈴　いえいえ。ただ髪の毛は人のものですし。でも、やっていることは凄いことなのでご相談させてもらったんです。

角　許可にためらいはなかったですか？

父　全然なかったですね。彼がやっていることならなんでも。ただ、こんなの見てどうなの？というのはありました（笑）。でも、自分で結んでみようとしてもできないよね。1回2回は結べるけどあんなに多くは結べない。

鈴　絶対無理ですね。最近、『ゆうあい』でも歩きながら結んでいますよ。

角　展示前ではやっていなかったんですか？

鈴　やっていたんですけど、更衣室でやっていましたね。みんなのいる場ではやっていなかったです。できたら頂戴ねというと、はいどうぞとくれることもあるんですよ。昔は作ったら床に捨てているだけでしたね。

角　不思議なサイクルが生まれていますね。これもあげてもいいんだというところにつながったんですね。

角　自分は今日、五井さんのお話を聞いてより作品にまつわる魅力が伝わってきたのですが、このことを第三者にもいかに伝えらえるかを考えていきたいと思っています。できれば作品ができるまでの過程を残していただけると嬉しいなと思います。自分たちのような外の人間にはできないことなので。

母　今度、作品を持って『ゆうあい』のバスが来る場面を写真に撮っておきたいと思います。弟が送り出しの係なので、頼んでおきます。

角　もしかすると作品が増えてくることが良いことばかりとも限らないので、良いことであれば続けていただいて。

母　今のところは良いことばかりで。やめたらやめたで全然良いと思っています。それはそれで、彼の成長だととらえていますので全然問題ないです。『ゆうあい』にさえ、通所してくれれば（笑）。

一つひとつの小さな変化を大切に

インタビュー

話し手　近守（NPO法人アートキャンプ新潟代表理事）
聞き手　坂野健一郎（東海・北陸ブロック障害者芸術文化活動広域支援センター）

新潟県内で福祉の仕事をしていると、いつの間にか出会っている。

『NPO法人アートキャンプ新潟』代表理事の近さんはそんな方です。様々な方が近さんを媒介に出会いつながっています。障害のある方の創作活動をはじめたら、その領域がぐんぐんと広がってきている気がします。

大きなことではないのかもしれませんが、少しずつ新しいことにチャレンジしている近さん。次なる展望をお伺いしました。

近：近守
坂：坂野健一郎

嬉しかった

坂　展示会を間近に控えている中でお時間いただきありがとうございます。最近は毎週のように近さんとお会いしているので、こうして改めて顔を合わせるのは不思議な感じがします。

近　いやいや、展示会は他人事じゃないでしょ。後で、諸々話ししよって（笑）。

坂　頑張ります（笑）。なんだかんだで、近さんとは付き合いが長いですよね。はじめてお会いしたのが、自分が前職で助成事業を担当していた頃なので、多分9年前ぐらいになります。

近　そんなに経つんだ。

坂　最初はぷれジョブ（※地域における障害児等支援の必要な学齢期の児童生徒に対して、就労体験などを行い地域との関係性の醸成や本人の成長を促す活動）での関りだったと思います。それから毎年新たな取り組みが。

近　前年と全く同じ年ってのはないね。また、地域活動をしていると自然と声がかかるんだわ。生まれ育った地域に恩返しをしたいという思いもあるし。

坂　近さんと話をしていると単純に友達が多いなと。

近　基本的に、自分に害を与えない人とは付き合うよ（笑）。害を与える人はダメ。

坂　さすがですね。自分には絶対に真似できない。そんな様々な方と地域で精力的に活動されてますが、きっかけは何かあったんですか？

近　地域と関わって嬉しいと思えたことに尽きるね。個人的な話をすると息子が2人いて、2人とも重度の自閉症。まあ、なかなか家族当事者でないと分からない苦労があります（笑）。昔は、そういった話を隠すってほどじゃないけど積極的に向けるようなことはしなかった。それが、ある時、百貨店で息子の書が飾られて。単純に嬉しかったね。良い字だねと作品自体の評価をもらったのも嬉しかったんだけど、それ以上に息子が書を通じて地域と関われたというか。それがきっかけでどんどん外に出て行こうと思いました。

坂　なるほど。それがぷれジョブや『アートキャンプ新潟』の原動力だと。でも、近さんは当事者の家族として様々な活動を生みだしていますが、あまり息子さんを前面に出していないですよね？

近　もちろん、息子のためという思いで様々な活動には取り組んでいます。でも、息子だけに焦点を当てると特殊な話になっちゃうでしょ。別に意図していた訳じゃないけど、多分活動が広がった理由はそこにあると思う。なんとなく、息子の絵が展示された経験を通じて、同じように出番や場を求めている親や本人が相当数いるんじゃないかということが直感で分かった。そうした同じ思いを持った人とつながりたいとも思ったし、何か救える場を作りたいなと。

坂　その共感の場や救える場を、就労とアートという誰もが共通するテーマでつなげたということですね。

近　あまり深くは考えてはいなかったけど、両方ともあくまで手段って感じ。結果として障害のある方の暮らしが豊かになればいいなと。今後はその先の、出口支援にも取り組んでいこうと考えています。

坂　『アートキャンプ新潟』の様子を見ていると、本当に様々な方が参加していますね。昨年度、会場を真上から眺めていたんですけど、一般の方も滞在時間が長いと言いますか、何度も同じ空間をぐるぐる回っていて滞留している感じがします。

近　だって、障害者だけでなく一般も居場所なんてないっしょ（笑）。自由にいてもいいんだって空間はあるようでないのかもしれない。あとは、同年代や昔っからの知人もいつの間にか病んでて、そうした連中が自然とやってくるんだわ。夜遅くなったんで、帰れといっても帰らない。そして、次の日の早朝からまた会場に来る（笑）。

坂　まさしく居場所ですね。

創作の場

近　居場所と言えば、今年度からは展示会ほど大がかりではない誰もが参加できる場を定期的に開催しています。

坂　創作の場ですね。5月からでしたっけ？

近　そうそう。やる度に人数が増えてるね。凄いですわ。月に1回開催しているんだけど、次の1ヶ月を楽しみにする人の輪ができてきました。もっとやってくれという声もあるけど、物足りないぐらいが丁度良いと思っています。

坂　創作の場はどういう経緯でやろうと思いついたんですか？

近　単純に居場所がない人が多いでしょと（笑）。そんな声がアートキャンプやぷれジョブ、また自治会での活動の中から自然と聞こえてきたんですよ。人それぞれ暮らし方は違うんだけど、何かし

らの事情でサードプレイスを求めている方は多い。

坂　どんな方が来られています？

近　障害の有無に関わらず色んな方が来ていますね。男性も女性も、高齢者も子どもも、働いている人もいない人も。

坂　意図していた以上の広がりを見せていますね。

近　福祉施設もやることが決まっていて、なかなか創作も含めて余暇の時間を作れないし、一般の方も色々と抱えているんですよ。そんな人たちがここにいてもいいんだよと、安心できる場を作りたかったから。

坂　上越市でも来年度は創作の場をはじめます。

近　全県でどんどん広げていきたいね。あとは似たような取り組みなんだけど寺や神社を巻き込んでいきたいと考えていますわ。

坂　寺も神社も地域のシンボル的な場所で、元々人が集まる場ですよね。

近　そう。そんな地域の人が集う場所で、小さな展示会や創作の場をどんどん開催していきたいなと。小千谷市で今回展示をしてとても良い空間ができたんだよ。入館料は有料にしたんだけど結構来館者がいて、やっぱり寺で間違いないと（笑）。

坂　子どもの頃、よくわからないけど寺に行ってました。そこには、地域の方がだいたい集まっていてみんなで念仏を唱えてました。

近　小さな展示会や創作の場は、どことなく元々寺や神社がもっていた機能と似ている気がするんだよね。

坂　確かに地域でいつの間にか生まれていた公共の場みたいな性質がありますよね。

親や周りが元気でいなきゃ

近　ちょっとだけ当事者の親としての立場から話をしてもいい？

坂　どうぞ、どうぞ。

近　この歳になって、自分も体力の衰えも感じています。展示の準備やらここ数日忙しくて。目の当たりも自律神経がやられたのかピクピクしてますわ（笑）。ふとした時に自分が倒れたらと思うことが増えたね。

坂　近さんが倒れたら家族的にはアウトですか？

近　完全にアウトだね。今のままってわけにはいかない。当事者の親以上に、家族の支え手としての役割が大きいから。

坂　当事者本人に合わせて、親や家族の支援も重要です。だからこそ横断的に様々な方を支えられる仕組みが必要ですね。

近　それを制度でガチガチにやっても、大体は漏れが出てきます。そうした漏れを緩くカバーしていく一つのツールとしてアートや創作の場があるのかもしれない。

坂　障害のある方の創作活動を支援していくことは、当事者本人以上にその周りにいる方にも良い方向に作用していくと。

近　そう思います。百貨店で息子の書を飾ってもらって嬉しかったもんね。これまでやってきた展示会の様子を見ていると、本人以上に家族や施設の職員がはしゃいでる場面に多く出くわしました。そうした喜びや楽しさでつながっていきたいね。当事者本人だけでなく、親や周りが元気でいなきゃ。純粋に良いと思います。笑顔とか優しさだけじゃなく、みんなが元気（笑）。倒れたらおしまいだもの。

坂　パワースポットじゃないですか。なかなか制度上では、元気が出る場所を作りますと言っても担当窓口も呆気にとられますね。そもそもどこが窓口かさえ分からない（笑）。

近　そうなんだよね。怪しいし。でも実際、多くの人が元気、出ているんだよ。誰かの元気を吸い取って、片一方が弱くなるんじゃなくみんなが元気になっている気がする。

坂　でも近さんは吸い取られてる時、ありますよね（笑）。

近　バレてた（笑）。1日、話を聞いているとさすがに干からびるって。

螺旋のように

坂　それにしても、今年度も新たな取り組みをたくさんしましたよね。特に『あしたの星☆』。舞台芸術における公開パフォーマンスは非常に大きな反響がありました。

近　いやー、問合せからまいったね。相談支援の大変さが身に沁みました（笑）。結果40組もの申込があったし、これは続けていきたいね。自分を表現したいという方の思いに全部は応えることはできないけど、出来る限りカバーしていきたい。

坂　久しぶりでしたよ。主催者も含めみんなが楽しい事業。

近　次は高齢者や子どもからも積極的に参加してもらいたいね。

坂　ご長寿クイズみたいなの、面白いと思いますよ。怒られるかもしれませんが。

近　怒られるまでやってもいいんじゃない（笑）。

坂　あとは公開パフォーマンスでは入賞した方は本当に嬉しそうでしたね。

近　単純に、明確に褒められたという経験がないんだと思う。なんとなく良いはあっても、表彰されたことはまずない。次年度は色々な賞を作りたいね。クオリティにおける評価とは別の枠の。

坂　少し福祉の現場とも似てますね。

近　福祉の現場もとても素晴らしい実践をしているけど、中々評価が上がってこないよね。もっと現場サイドから楽しさを発信していかないと。色んな賞を作ったらいいんじゃない（笑）。

坂　清拭チャンピオンや、排泄介助マスターみたいな（笑）。優れた介護技術であるとともに、立派なパフォーマンスですね。

近　そうそう。障害のある方が創作活動に打ち込む姿やできていく過程自体がアートなように、日々何気なくやっている福祉の実践自体がアートだと思えるようになると楽しいと思う。

坂　確かに。自分も今年度の法人の新任者と一緒に、10年ぶりぐらいに介護技術を学んだのですが、リネン交換、めちゃくちゃかっこ良かったです。

近　そうした感覚を現場レベルで養う上でも福祉で文化芸術をやっていく意義はあると思います。やりたいことが多すぎて迷うことが悩みですわ。

坂　次は、鑑賞支援の取り組みですね。今回、近さんからの提案で一緒に取り組めて良かったです。登壇者側として、聾者が出られる際の配慮や、伝えたいことの情報の精査など本当に勉強になりました。

近　これもきっかけがあってね。長くなるので割愛しますが、やっぱり生きていくって色んな配慮が必要なんだよ。気づきから、同じようなことをぐるぐるやっていても、まったく同じってことはないんさ。

坂　螺旋ですね。自分は螺旋という言葉が好きで、真上から見ると単なる円ですが、側面から見ると拡がったり狭まったりしている。日常の中にも少しずつ変化があって。

近　そうやって、少しずつ真上から見た円が大きくなっていけばいいんじゃないの。

坂　実際、『アートキャンプ新潟』も今年度法人化して、次年度は創作活動だけでなく施設の経営も始めます。活動の規模も今までとは大きく変わりますが、最後にあえて事業をはじめた理由を教えてください。

近　一言、戻ってこれる場所を作りたかったんだよね。間近で一般就労が続かなくて引きこもってしまった人や、人間関係がうまくいかなくて生活がめちゃくちゃになってしまった人をいっぱい見てきたから。さすがに単発のイベントだけじゃ救えないでしょ。だから安心して戻ってこれる場所を制度としてやっていきたいと考えています。簡単ではないけど、地域に点在する仕事をもらって活躍することによって自信を取り戻すような仕組みを作りたいなと。

坂　元気と安心と余暇と文化。生活が豊かになる要素、盛沢山ですね。

近　話したいこともいっぱいあるけど長くなるっけ、別の機会に諸々相談させて（笑）。明後日からの展示作業、頑張ろって。

まちごと　まるごと　彼らのいばしょ

インタビュー

話し手　肥田野正明（㈱バウハウス代表取締役）
聞き手　高橋亜紀（まちごと美術館）
　　坂野健一郎（東海・北陸ブロック障害者芸術文化活動広域支援センター）

肥：肥田野正明
高：高橋亜紀
菅：坂野健一郎

単純に凄いと思った。

坂　今日はバレンタインですね。僕からですがチョコをどうぞ（取材時はH30年2月14日）。

肥　まさか、今日はじめてのチョコを男性からもらうとはね（笑）。

坂　せっかくなので（笑）。こんな緩さで今日はお話をお聞きしたいと思います。今は、『まちごと美術館』を通じて新潟県内のいたるところに障害のある方の絵画が飾られています。それも福祉の現場ではなく、一般企業のオフィスや寿司屋といったところで。新潟が誇るべき素晴らしい取り組みだと思いますが、そもそも始めたきっかけはなんだったんですか？

肥　いきさつは、うちの会社はビルメンテナンス業をやっているんですよ。実は障害のある方の一般就労の場は私たちの業界なんですね。そういった意味で元々関りはあった。それ以外の方は施設で働いていると。行った施設にたまたま絵があって、単純に凄いなと思ったんですよ。

坂　もともと肥田野さんはアートが好きだったんですか？

肥　若干。ニューヨークで絵を買ったことがあったんですよ。怪しいおじさんから（笑）。ハンバーガー食うかとかエサも出されて。確か50万円ぐらいで買ったんですよ。戻ってからこういった絵を持っているとネットに流したら、すぐに画商が飛んできて。いくらで買いましたかと聞かれたんで、100万と言ったら即決現金で100万払っていきました（笑）。

坂　肥田野さんには確たる審美眼があることが分かりました（笑）。

肥　同じように施設にあった絵が純粋に良いなと。そのあと、結構時間は経ったんだけど朧げに絵をレンタルできたらいいなという考えが。でも一人じゃできないなと。

坂　なんでレンタルだと思ったんですか。

肥　忘れちゃったんだけど、潜在的にあったのが自分の前職がリース業だったというところにつながると思います。そしてヒントになったのがグリーンリース。鉢を貸すことが商売になるなら絵も大丈夫だろうと（笑）。販売にしなかったのは、永続的な仕組みが作れないことと、購入はちょっと敷居が高いかなと考えたからです。

坂　12月のにいがたフォーラムでの話が印象的で、1か月3，000円であれば97％の社長が借りると。もう、だいたいの社長が借りるということを前提に事業スキームを作ったという話をお伺いしました。

肥　53％ね（笑）。97％の社長はこの事業は良い事業だと。

坂　失礼しました。そしてリサーチ結果のとおり広がりを見せて。

肥　そうなんです。なんでだろう。やっぱり福祉の市場以外も見据えているからかもしれない。自分の立ち位置としては、経済人なので付き合いもそういった方達が多いです。その人から見て、この絵がどう感じるかということがなんとなく分かる。この間も、パン家からこの絵、借りるわと。

坂　まさしく、福祉のつながり方じゃないですね（笑）。福祉側でもアートリースをやっている事業所はいくつかあるのですが、『まちごと美術館』の広がりは本当にモデルになると思います。貸し手が増えていても、借り手がなかなか見つからないというのが課題です。

肥　羨ましい（笑）。アーティストを紹介してほしいですよ。広がっているのは、民のサービスだと割り切っていることですかね。反対に福祉や公共サービスでやるべきこともたくさんある。このアートリースをやってみて、その中間は難しいなと思います。例えば、会社なんかでも理念なくCSRとして福祉と関わると少しいやらしさを感じることもある。その間にアートが入ると、なんかその感覚がなくなるんです。単純にこの絵は良いと。一生懸命、福祉に力を入れている感がなくなるんです。

坂　アートの力ってそういった部分を一気に乗り越えていきますよね。福祉は大変そうだとかかわいそうだとかじゃなくて、単純に面白いね・明るいね、そもそも良い絵だと。

肥　良いところを売りにして、どんどん儲けた方が持続可能な仕組みを作れるのに。福祉の文脈もようやく変わりつつありますが、まだ若干儲けることが悪という認識がある。儲けちゃだめだから公的資金をくれと（笑）。

世界が変わっていく

坂　実際、この事業がはじまってどのような反響がありますか？

肥　報告書を作ったんでちょっと読んでみてください。

坂　関わった人58，000人‼。凄い規模ですね。展示会以上の効果がありますよ。

肥　例えば、企業の社長クラスは教養人が多いのでアートも好きなんですよ。ただ、末端の社員には中々伝わらない。でも、だんだんとこの絵は誰が描いたんですかと社員も興味を持ってくれるようになってきました。絵の魅力に気付いてくれたんですね。

坂　そこから間接的に福祉の理解にもつながっていますよね。

肥　そうなんですよ。結構お互いが良い感じになっていることが多いです。例えば、あるハンバーガーショップで県下複数の店舗で絵画を展示

肥　総合学習にこのコンテンツは絶対に良いと思う。悲壮感というか、なんかそういう暗いイメージが全然なくて、こどもの食いつき方が凄いですよ。

坂　他に『まちごと美術館』とつながりたいという話はありませんか？

肥　高橋さんの方で、何か聞いている？

高　面白いもので、インテリアショップに飾りたいという話があります。

坂　モデルハウスともつながりそうですね。将来的に絵画付きの家を販売しますとか。

高　そういった話が増えればアーティストが輝く場も増えていきますね。障害者ではなく、作家としてのデビューも自然とできていくような、そんな時代が近い未来に来るんじゃないかなと期待しています。

肥　半面、活動が広がれば広がるほど障害のある方の創作活動を食い物にしてんじゃないかという声も増えてきそうでちょっとだけ心配していますす。

坂　絶対増えてきますよ。それも本人や家族とはかけ離れた場所で。もしかしたら福祉の専門職からも出てくるかもしれない。でも、大きなトラブルでもない限り大体は嫉妬の声でしかないので気にしなくてもいいと思います(笑)。理念が間違ってなければ、事業の多少の失敗はあっても方向性はぶれないと思いますよ。

肥　我々、民間ベースでできることを恐れずにどんどんやっていきたいね。

公的資金でやるべきこと

坂　反面、我々が実施している障害者芸術文化活動普及支援事業は、公的資金で実施している事業ですが、税金を使っているからこそやるべきこと・期待することはなんですか？

肥　そうですね。自分の中では割とはっきりしています。新たな取り組み・先駆的な事業であることを前提に、それがしっかりと残る事業にしていくことだと思います。一過性で終わるのではなく、地域に何が残ってどのような効果が表れるかを評価していく必要があるのではと。補助が終わったから事業が打ち切りになるのではなく、公的資金を入れてまで必要な事業だからこそ永続的な仕組みにしていく必要があるんじゃないかな。

坂　必要な事業だからこそ、残す仕組みを作っていく必要があると。自分の前職ではそういったケースがいくつもあったので痛いほど分かります(笑)。補助が消えていった瞬間、どんどん事業がなくなっていきましたね。

肥　そうそう。ブロックセンターとしては、そのあたりどう考えてます？

坂　ちょっと考え方からすると違うのかもしれませんが、ブロックセンターがなくてもまわる仕組みづくりをできたらなと考えています。重点的に考えているのは2つあって、1つは自由に誰もが気軽に参加できる創作の場づくり。もっと厳密に言えば創作の場を通じたサードプレイスを各地に広げていくこと。もう1つは人材育成に尽きると思います。人は残りますから。

肥　創作の場は、結構広がってきているよね。色々な可能性があると思います。人材育成ね…。確かにそうなんだけど、一言で人材育成と言っても色々あるよね。どんな人物像をイメージしているの？

坂　ぐいぐいきますね（笑）。すみません、福祉の色が強くなります。裾野から上級までいくつか段階的に分かれるのですが、まずやっていきたいことは学生と施設職員を対象とした人材育成です。障害のある方の創作活動を通じて、改めて福祉の魅力を再考したりそもそも人と接することの意義のようなものを問いかけていきたいと考えています。

肥　学生は結構、興味を持ち始めているよね。

坂　肥田野さんも何度もおっしゃっていますが、障害のある方の創作活動を拡げていくためには、個々にも環境的にも様々なヒト・コト・モノをつなげていく必要があります。このことは、そもそも福祉の本来的な仕事なんじゃないかなと最近は思っています。そして、学生を中心に若い世代の方が障害のある方の創作活動に興味を持ってくれています。なんか直感で若い方が福祉の魅力を感じているんじゃないかなと嬉しくなってきます。

肥　福祉の魅力を感じましたと。じゃあその先は？

坂　問い続ける力を持つことですね。とても時間のかかることですが。研修を1回やったぐらいではどうにもならない。ただ、自分の地域をどうしていきたいみたいな答えのない問いにチャレンジし続けるようなことなんですけど、それができる人って素敵だと思いますし、現にそういった実践家に自分は憧れます（笑）。

肥　なるほど。そういった現場レベルの話もなんとなく分かります。自分としては、もっと専門性をもった人材育成にもチャレンジしてもらいたい。具体的な話をさせてもらうとアートマネジメントがしっかりとできる人材育成です。ヒト・コト・モノ、そしてカネをただつなげるだけでなく、うまく回せる人材も必要なんじゃないかと思います。例えばこの『まちごと美術館』だって、そういった人材がいれば自分も本業に集中できる（笑）。しっかりと事業として継続性を持たせることのできる人材はこの国の宝だよね。

坂　とても勉強になりました。肥田野さん、そうした人材がぽつぽつとアンテナに引っかかるようにまずは下地を一緒につくっていきましょう。最近、この活動に協力してくれそうな結構大きな話をいただきまして。

肥　そういう話は大好き（笑）。『まちごと美術館』も県外からも仕事の依頼が来ている状況の中で、既に拠点が1ヵ所だけだと限界だなと思っています。協力してくれる人と組んで、フランチャイズなんかも考えていて。全然儲からないことは打算済みですが（笑）。障害のある方の創作活動が広がることによって、社会が成熟したり地域の風景が変わっていくことを目の当たりにしているのでやめられないですね。さっさと動きましょうよ。

坂　その前に報告書に掲載する写真を撮らせてください（笑）。

インタビュー

施設職員のチャレンジと関わり合いの変化

話し手　高坂 ひろみ（かなやの里ほほえみ）・木村ひろし（かなやの里ほほえみ）
聞き手　菅井 豊子（東海・北陸ブロック障害者芸術文化活動広域支援センター）

昨年6月、上越市内の福祉施設へ作品調査に伺った時に出会ったのが『かなやの里ほほえみ』の職員・高坂ひろみさんでした。施設での創作活動の様子を聞いていく中で、特別な思いを込めて話されていたのが「木村ひろし」さんの作品でした。「木村さんの作品を、もっと施設の外の人たちに見てもらいたいんです！」。その言葉をきっかけに、高坂さんは忙しい仕事の合間を縫って、上越展での自主展示に向けたワークショップに参加。展示会では手作りのキャプションとともに木村さんの絵を自ら展示し〝施設の外の人たち〟に、木村さんの絵の魅力を届けました。施設職員として、今回の体験から感じたことや身近な変化についてお聞きしました。

木：木村ひろし
高：高坂ひろみ
菅：菅井豊子

今年71歳。子供の頃の思い出が絵の原点

木　高坂さん、紙飛行機もあるけもさ、いっぱいあるけもどうする？

高　持ってるの？今？　ここで見せたい？

木　うん。

菅　木村さんは紙飛行機も作るんですか？

高　紙飛行機を折って飛ばすのも得意だし、木村さんは得意なことがいっぱいあるんですよ。

菅　絵だけじゃなくて？

木　手品、ヒモ手品、紐を使った手品。コマ回しもできる。昔やったんだ。小さい時。

菅　習字も上手なんですね。字だけじゃなくて墨でも絵を描かれるんですね。

高　多才なんですよ（笑）。

菅　木村さんの絵、上越展で展示しましたけど、木村さんも見に来て下さいましたよね。実際、見てどうでした？

高　みんなに、いっぱいの人に見てもらおうと思って、木村さんの展示したの。ちっちゃいのから大きいのまで、あったもんね。

木　あったあった。

高　コスキとか湯呑の絵も、昔懐かしいでしょ。

木　コスキ、昔やったんだわ。

高　お父さんの仕事のお手伝いとか、お家のお手伝いしてね、いろんな経験されてるから、これだけ多才なんだよね。

菅　いろんな絵があって、カラフルで、題材の幅がホント広いですよね。

高　ぞれぞれに自分の物語があるだよね。舟とかボートとかも乗ったことあるんだよね。

木　あるある。直江津の海で、もう小さい時。

菅　その時のことを思いだして、この絵を描いたんですか？

木　そうそう。

菅　木村さんって、今おいくつなんでしたっけ？

木　70歳。

高　まもなく2月22日で71歳。

木　2ばっか。

高　昭和22年2月22日。覚えやすい（笑）

この魅力を施設の外にも伝えたい…職員としての熱き思い

菅　最初に高坂さんにお会いしたのって去年の6月。こちらに作品調査に伺った時でしたよね。作品を調査したいという電話を受けて、施設のみなさんの反応はどうでしたか？

高　私自身は、ここの利用者さんの活動を他の方々に知ってもらういい機会だなと思いましたね。絵を見てると、私たちにはない感性とか、そういうものが見て取れるので、ぜひ多くの人に知っていただきたいな！って。初めは、アール・ブリュットって言葉もよく分からなかったんですけど、言葉の意味を知って、利用者さんの生の感性をそのまま生かしたアートってことで、それはすごく魅力的だから、利用者さんにとってもすごくいいことだなって思ってます。

菅　作品調査に伺った時、高坂さんがすごく熱く木村さんの作品について語ってくださったことが強く印象に残ってます。

高　そうそう、もうね、木村さんの絵をぜひ見ていただきたいなという思いがあって。

菅　高坂さんは、木村さんの絵の魅力ってどんなところだと思いますか？

高　やっぱりカラフルさ、丁寧さ。普通の人だったら選ばない配色センスが素晴らしい！

木　濃く描くからさ、紙が破けちゃう。色鉛筆で。

高　あとは、木村さんの中のストーリー。思い出とか印象に残った話を絵を描きながらしてくださったりとか。

木　そんな上手じゃないけもさ、他に上手な人いっぱいいる。

高　謙虚だね～（笑）。でも木村さんには木村さんの魅力があって、他の人には描けない絵なんだよ。

ワークショップから広がった交流と学び

菅　作品調査に伺ったことがきっかけで、そこからワークショップにも参加してくださって、忙しい中、高坂さん自身の手で木村さんの作品を展示するところまでいきましたね。

高　もうね、木村さんの作品を見てほしいって感じで。あとは、ワークショップを重ねるごとにアール・ブリュットの魅力がだんだん分かってきて、他の方々の作品を見てみたい、それを周りの人た

ちはどうやって支えているのかを知ることで自分の仕事に還元できるなぁって。

菅　参加者の方ともいろいろ情報交換しましたか？

高　そうそう、ありました。施設職員として参加していた方の事業所に実際に行って、作業風景を見せてもらって、職員さんがどんな風に利用者さんに関わっているのかとか、作品をどう扱っているかとか、作品の発表場所とかね、お聞きして。ワークショップに参加しなければこういう交流を持てなかったし、障害者アートの情報も知る機会がなかったですね。

菅　キャッチフレーズを作るワークショップでは、木村さんの作品の魅力について、参加者の皆さんの前でも熱く紹介していただきましたよね（笑）

高　木村さんの絵を見てもらって、みんなビックリしてたよ。まさか70歳の人が描いたなんて思っていないから、みんな驚かれてた。

木　そうらね。

高　この時は、自分では思いつかないキャッチフレーズを、参加者のみなさんから色々もらって、実際、展示のキャプションを書く時に助かりました

菅　木村さん、今年はどんな絵を描きますか？

木　思った時に何でも描く。鶏でもひよこでも。でっかく描くから紙なくなっちゃうんだ。夜遅くまで10時か11時まで描いちゃうから、絵好きだからさ。夜中まで描いちゃう。

展示を通しての関わりあいの変化

菅　今回の体験を通して、高坂さん自身、木村さんとの関わりに何か変化がありましたか？

高　木村さんを深く知ることができましたね。同じ話をリピートするんだけど、それって、1回目2回目は真剣に聞くんだけど、あんまり聞いてないじゃない。また、あの話か…で終わってたんだけど、キャプション書くからよく聞いてみたら、昔の兄弟の関係とか親との関係とか、昔の上越の暮らしとか、色んなことが見えてくるんですよ。その中で、木村さんがどう育ってきたか、木村さんを知るきっかけになったし、地域を知るきっかけにもなったし、おもしろいなあって。

木　絵描くの好きだからさ。

高　絵を展示するよって言ったことで、木村さんが生き生きと生活できる、目標があると日々の暮らしがイキイキとしてくる。やっぱり目標あったほうがいいよね。みんなに見てもらえると思うと張り切っちゃうよね

木　そうそう。

菅　木村さん、もうすぐお誕生日で71歳ですけど、何歳まで絵を描きますか？

木　死ぬまでらね。

高　だよね（笑）描けるだけ描きたいよね！

木　100歳まで描きたいけどダメかも～。腰は曲がってくるしさ…

高　菅：アハハハ…

71歳は100枚くらい描きます！（笑）

①

②

③

④

⑤

⑥

≪成果物≫

①参加型展示会ワークショップ
～一緒に展示会を作りませんか～

②障害がいとアート　アート・ディレクター養成研修会
2017・10・12～13

③障害がいとアート　アート・ディレクター養成研修会
2018・3・6～7

④アール・ブリュット展 in 上越３　生活の柄

⑤あしたの星☆
出演者・参加者大募集

⑥障害のある方の創作活動に係る事例検討会

成果物・情報発信

≪情報発信≫

【Facebook ページ】
いいね数　416 件
記事投稿数　23 件
総閲覧数　32,028 人
（平成 29 年 6 月 9 日～平成 30 年 3 月 18 日）
記事最高閲覧数　1,026 人
内容　イベント広報／展示会周知

【ホームページ】
総閲覧数　8,774 件
（平成 29 年 6 月 9 日～平成 30 年 3 月 18 日）
掲載記事数　2 件
内容　アール・ブリュットにまつわるイベントの広報

≪新聞掲載≫

・上越タイムス
平成 29 年 11 月 7,9,11,12,14,16,17 日掲載
アール・ブリュット展 in 上越３　連載企画（全 7 回）

・新潟日報
平成 29 年 11 月 28 日掲載
障害がある人もスター目指そう　イベント出場者募集

・新潟日報
平成 30 年 1 月 9 日掲載
あふれる個性 輝く発想　上越署 障害者の絵画展

≪テレビ放映≫

・テレビ新潟放送網（TeNY）
平成 29 年 7 月 28 日放送
TeNY 新潟一番 3 部県内ニュース
新潟青陵大学展示会＆セミナー開催

成果と課題

平成 29 年度も本当に多くの機関・方々に支えられ障害者芸術文化活動普及支援事業を遂行することができました。みんなでいきるでは平成 28 年度より障害者の芸術文化活動支援モデル事業の採択を受け事業を実施してきましたが、昨年度と比較しこの 1 年間であった変化や、今後の課題を下記のとおりまとめました。

成果について

1 協働での実施

平成 28 年度は展示会や研修会も単独事業に終始しましたが、今年度は新潟県内においてはほとんどが先方からの持ちかけによる協働での事業実施となりました。教育機関と連携した展示会やセミナーの開催、同じく障害のある方の芸術文化活動を推進する団体とのパフォーマー発掘事業、行政機関や警察署における展示会の開催など、つながることによって本当に活動の幅が広がったと実感しています。障害のある方の創作活動はヒトやモノ、コトを一気につなげていく力があります。

2 人材育成

展示会や研修会を通じて、新たに多くの方々が障害のある方の創作活動に関わってくれました。中でも福祉分野ではない一般大学・短大の学生がこの活動に興味を持ち、施設への調査や展示会の展示作業などに積極的に関わってくれたことは大きな意義があると言えます。前述したヒト・コト・モノをつなげていくことは、一見新しい取り組みのようで福祉の本質的な仕事です。福祉の本質に多くの若い世代の方が魅力を感じているという事実。そのことを発信していくことが我々の責務です。

今後の課題について

1 中間支援組織のあり方について

障害者芸術文化活動普及支援事業の基本的な性質は中間支援です。障害のある方の創作活動を支えていくために官民そして当事者や住民の間にたち、そのパイプ役として中立的な立場で側面的な支援をする組織となります。

そのため、自らの団体の活動のためではなく、外に広く向けた事業展開が求められています。この事業を通じて、特に中間支援組織として求められていることは①専門的な相談支援、②人材育成、③人的ネットワークの形成、④情報収集・発信機能、⑤財源確保の大きく 5 つに分けられます。

①～③については一言で表すと人に向けた支援です。最終的に地域を動かしていくもしくは地域に残るものは人です。この事業の最大のアウトカムは如何に人を作っていくかだと整理しています。研修会だけでなく展示会や舞台芸術なども含めて、ただ単にイベントを開催するのではなくその事業を通じて人にどのような変化があったのか、支援の軸をよりソフト面の整備に焦点を置く必要性を感じています。

④については、受発信における情報の伝達の漏れ・誤りがないよう、センターの機能としてしっかりと情報を管理していく必要があります。半面、情報の受発信にはコストがかかります。効率よくかつ円滑に情報の受発信を行うためにも中間支援組織として様々な団体とパイプをつくっていく必要があります。

⑤については、相談者である団体や個人だけでなくこの事業の実施団体自体が継続した事業を継続するためにも、補助による事業費・単発の助成金だけでなく安定してマネタイズできる仕組みを構築することが急務と言えます。

2 創作の場

自由に創作活動ができる場を求めている方が多数いることが分かりました。これは制度における事業所毎の創作活動ではなく、もっと誰もが自由に集まり自らの作品を語ったりお互いが相談できる場のことを指します。今年度から創作の場を月に 1 回開催している『アートキャンプ新潟』の実績を見ると、特に休日における余暇活動としての創作の場はニーズが高く回を重ねるごとに参加者が増えています。お互いが作品を持ち寄り語りあうことで人と人とのつながりが生まれ、そこから新たな創作活動のヒントを得たり友人ができるなど生活そのものが豊かになる事例も出ています。気軽に創作ができる場が、少なくとも各自治体単位で展開されることが重要だと考えます。

発行日 2018 年 3 月
企画・編集・発行
社会福祉法人みんなでいきる

発行責任者：大島 誠
デザイン：小出真吾 (IDEKO)
写真：角地智史 他
イラスト：ワタナベメイ

東海･北陸ブロック障害者芸術文化活動広域支援センター
〒943-0834　新潟県上越市西城町 2-10-25-307
社会福祉法人みんなでいきる 内
TEL：025-530-7264　FAX：025-530-7261
MAIL：info@niigata-artbrut.net
HP：http://niigata-artbrut.net/

本書は厚生労働省
「平成 29 年度 障害者芸術文化活動普及支援事業」
の一環として制作しました。